

在米日本革命党

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Hosei journal of sociology and social sciences / 社会志林

(巻 / Volume)

66

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

78

(発行年 / Year)

2020-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00023190>

在米日本革命党

宮 永 孝

はじめに

- 一 共産主義と社会主義の異同および沿革
- 一 コミュニズムの紹介者 加藤弘之
- 一 ソシアリズムの紹介者 加藤弘之
- 一 明治期の英和辞典にみる Communism の訳語の変せん
- 一 日本における社会主義運動の萌芽——「東洋社会党」
- 一 サンフランシスコの「愛国有志同盟」
- 一 カリフォルニア州における幸徳秋水
- 一 明治天皇への公開状
- 一 ——日本皇帝睦仁君に与ふむつひと あた
- 一 大逆事件の勃発
- 一 絞首台への道
- 一 大逆事件の余波
- 一 むすび
- 一 英文レジュメ (Abstract in English)

はじめに

中江兆民（一八四七〜一九〇二）は、土佐が生んだ傑出した自由民権思想家である。明治絶対主義政府は、自由主義的な思想や政府批判の言論を弾圧するために、ざんぼう律（悪口を取り締まる法規）・新聞紙条例（明治8「一八七五」・6公布）について、集会条例（明治13「一八八〇」・4公布）を発令し、集会・結社を取りしめ、また急進主義的傾向をもつ各種の政党つぶしをはかった。これらの法律は民権運動弾圧の三法であった。兆民は、そのころ民衆の思想的覚醒をうながすかのような談話を発表した。題して「思想不宜隠匿」しごうはよろしくいんたくすべからず（思想はこっそりかくすものではない）。

ない意)である。

かれによると、人はそれぞれいろいろな考えをもっているという。人心(ひとのこころ)が同じでないのは、人の思想にいろいろ違いがあるからである。われの考えは、かれ(相手)のものと同じではない。古人(むかしの人)の考えは、現代人のものと異なる。じぶんの思想をかくし、相手にもらさないのは、東洋人に共通してみられる弊害である。思想は発洩(表現すべきもの)という。

思想ハ心ニ在リ、故ニ形ノ見ル可キ無シ、必ズヤ言ニ発シ。書ニ写シ。行ニ顯ハシテ。而シテ後チ得テ知ル可キナリ。

注・『東洋自由新聞』第十一号所収、明治14・4・2より。

《大意》

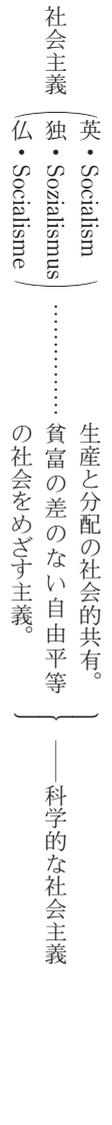
思想はころにある。だからその形は目にはみえない。それゆえ思想はかならず言葉に発し、文字にして書きしるし、行動においてあらわさねばならない。そうしてはじめて、その思想がわかり、じぶんのものとなる。⁽¹⁾

一 共産主義と社会主義の異同および沿革

思想とは、一般的なみで、われわれの心に生じるおもいや考え、——社会や人生、政治などに対する一定の考えなどをいう。が、中には穩健なものや急進的で危険なものもある。本稿において中心となるテーマは、つぎのようなイズム(主義、説)である。

英・Communism	生産手段の社会的共有。
独・Kommunismus	階級、搾取のない万人平
仏・Communiste	等の社会をめざす思想。
共産主義	科学的な社会主義。

共産主義は、社会主義と同視され、同義語的に用いられる場合が多い。が、目的と方法において違いがある。⁽²⁾



共産主義、社会主義の名称の出現とその概念。

この両語がいみするものを、いま簡単にしるしたが、もうすこしその由来と本義についてのべてみたい。まず共産主義であるが、Communisme (仏) という語がはじめてフランスに姿をみせたのは、一八四〇年(天保11)以後のことらしい。共産主義は、私有財産をすべての社会悪の根源とするものであり、それをなくす方法は、財産や利益を共有することであった。⁽³⁾ Socialisme (仏) という語は、一八三〇年代にフランスの『グロープ』誌に現われたが、その初期の歴史についてははっきりしていないという(O・E・D)。⁽⁴⁾ この語は政治的、経済的理論であり、生産手段や商品の分配を政府または共同社会の所有に帰する定義であるという。⁽⁴⁾ 要するに生産財を国有にする考え方である。

共産主義は、近世において突然おこったものではなく、古代ギリシャにおいて、それらしき考えを語った者がいた。アテネの哲学者ソクラテス(四七〇?—三九九B・C)である。かれは共産主義的な考えを「共和国」において説いた。その大要は、

——人間社会において生じる罪悪の原因は、ものの私有にある。ものの所有の多いことが、人にうらみやねたみを生じさせ、人をあやめうぼうこともある。ものを持つこと、もたざることが罪悪の根源であり、私有を廃し、共有にすれば、病根をたつことができる。

ソクラテスの弟子プラトン(四二七?—三四七B・C?)は、財産を共有にすること、すなわち共産状態にすることを理想とした。かれはまた妻(配偶の女)についても共有主義をとなえた。「共和国」にみられる社会的階級は三つある。すなわち——

- 支配者
- 守護者
- 労働者、職人、耕作者⁽⁵⁾(農夫)

などであり、共産的生活を送ることができるのは「自由人」だけであり、奴隷は除外されていた。プラトンの説く社会は、理想的共産主義にすぎなかった。

中世において、プラトンの共産的思想を復元しようとした者は、トマス・モア（一四七八～一五三五、イギリスの思想家・政治家、のちに処刑される）である。かれは大陸旅行ちゅうに『ユートピア』をラテン語でかき、資本原畜期の悲しむべきイギリス社会を批判した。

社会に寄生し、そこから利益をえて生活しているごくつぶしはだれか。それは

貴族——非生産者。貧者を搾取する者。

僧侶——金銭のめぐみによって生活している者。

物ごい——食物や金銭をめぐんでもらって生活している者。

ぜいたく品の製造者——金がすべてであり、金を尺度とする者。

モアのみるところ、これらの人間は社会の無用の長物なのである。いずこの国であれ、私有財産制が社会悪のみなもとであり、それが存続するかぎり、正義・公正・繁栄はえられない、と考えた。

その緩和剤はなにか。それは財産や利益を共有することである。住民はみな農場ではたらくか、生産業に従事する。毎日のらくらすることは許されない。一日六時間はたらき、残りの時間を公的な施設での学習にあてるか、気晴らしに使う。衣類や食物は、倉庫や市場にいけばもらえる。旅行するときは役人の許可が必要であるが、旅費は不要である。なぜなら人がいくところにある家は、みなわが家であり、食物もねぐらも無償であたえられるからである。その代り、滞在先に労働を提供する必要がある。⁽⁶⁾男女は同権であるが、兵役の義務がある。

モアとおなじ思想的傾向をもつ人物に、トマス・カムパネルラ（一五六八～一六三九、イタリアの哲学者・政治学者。出獄後、パリで没）がいる。カムパネルラはドミニコ派の修道僧であり、獄中で執筆した『太陽の都』^{キウイタス、リス}（一六二三年）において、教皇を首長とする理想社会をえがいた。かれはプラトンとおなじように、財産の共有となえ、政治を哲学者にゆだねよといった。

人は家をかまえ、家族をもつと、わが子の立身富貴をのぞむようになり、また人は力がなく貧しいと、どん欲になり、人をあざむき、偽善者と

なる。カムパネルラは万民に質素にくらすよう誓わせたうえ、いっさいの技術や製品の均等配分をといた。

近世において共産主義Ⅱ社会主義をとなえた者は数多おり、枚挙にいとまがないくらいである。いまその代表者を各国別にあげると、つぎのようになる。

フランス

フランソワ・エル・バブーフ（一七六〇〜九七、フランスの革命家。ジャーナリスト）……土地台帳監査官のとき、封建社会の矛盾を実感し、土地私有を否定する思想をいだくようになった。フランス革命期に過激分子として活躍した。マルクス、ブルードン、バクニーンの社会主義、無政府主義哲学の先駆者。

労働階級の主権を宣し、相続法や私有財産の廃止をとなえた。

サン・シモン（一七六〇〜一八二五、フランスの空想的社会主義者）……貴族階級の出身。ルソーの影響をうけた。貧民層の福祉に大きな関心をよせた。階級闘争と社会革命による新社会の建設を主張した。

フランソワ・マリ・シャルル・フリーエ（一七七二〜一八三七、フランスの空想的社会主義者）……商家に生まれ、遺産によりヨーロッパ各地をめぐる、ユートピア的社会を構想した。その一生は不遇であった。人に資本家になるよう説き、女性は経済的に自立するよういった。⁽⁷⁾

ピエール・ジョゼフ・ブルードン（一八〇九〜六五、フランスの社会主義者）……貧しい家に生まれ、植字工などの職につきながら、社会主義思想をまんだ。機会均等が能力の均等をもたらすといった。また財産権を攻撃した。『所有とはなにか？』（一八四〇年）という本をかき、「所有とは窃盗である」といった。⁽⁸⁾

ジャン・ジョセフ・シャルル・ルイ・ブラン（一八一〜八二、フランスの社会主義者・政治家）……スペインのマドリッドで生まれ、王政復古で家が没落後、パリで苦学し、七月革命後ジャーナリストとして活躍した。まことの社会革命を実現するには、政治機構を民主的にせねばならぬと説いた。

民主的な国家だけが、国民に職場を提供できるとした。が、かれの主張は空説におわった。

イギリス

ロバート・オーエン（一七七一〜一八五八、イギリスの空想社会主義者）……イギリス流の社会主義の創立者。一介の徒弟から身をおこし、燃^た系^し会社^社の経営者となり、工場労働者の生活改善につくした。機械的生産力の増加、富の増大が、貧困の根源とかがえた。協同組合制度を唱道し、アメリカにおいて、共産主義的なニュー・ハーモニー村（インディアナ州）の建設を試みたが失敗した。貧困の原因は、生産の領域にあるのではなく、分配にあるとした。

ジョン・フレデリック・デニソン・モリス（一八〇五〜七二、イギリスの神学者・聖職者）……ロンドン大学やケンブリッジ大で教鞭をとるかたわら、一八五四年に「労働者カレッジ」を設立し、C・キングズリーらとキリスト教社会主義運動を指導した。

チャールズ・キングズリー（一八一九〜七五、イギリス国教会の牧師・作家）……ケンブリッジ大で近代史を講じた。カーライルの影響をうけたキリスト教社会主義者。かれはモリスとともに労働者階級の福祉に大きな関心をよせ、経済競争に反対し、当時の経済制度に、キリスト教的信条を適用するよう主張した。⁽⁹⁾

ドイツ

ヨハン・カール・ロートベルトゥス（一八〇五〜七五、ドイツの経済学者・政治家）……大学教授のむすこに生まれ、法律家として出発した。社会進化の過程について考察した。社会が発展するには三つの段階がある。第一の段階は奴隷いまたは私有財産制を特徴とし、第二は土地と資本の私有。第三は土地と資本を手にした経済的に抜け目のない、しかも運にめぐまれた者が、不幸な人間や無学の者にたいして権力を行使する。ロートベルトゥスの究極の目的は、共産主義社会の樹立であった。土地や資本を国有財産とし、労働は生産性に応じてむくわれるものと考えた。⁽¹⁰⁾

カール・ハインリヒ・マルクス（一八一八〜八三、ドイツの革命家・哲学者・経済学者）……富裕なユダヤ人の弁護士の子として生まれ、ボン、ベルリン両大学にまなび、『ライン新聞』の編集に従事。弾圧をうけ、パリにおもむき、そこでブルードンらの革命家グループと接触し、社会運動を研究し、社会主義者となった。のちロンドンに亡命し、永住。貧窮のなかで、生涯の友エンゲルスの経済的支援によって、かろうじて生計をたもち、大英博物館

に通い、ライフワーク『資本論』に取りくんだ(未完)。

資本主義社会を批判し、社会主義革命の必然性を示証することに努めた。

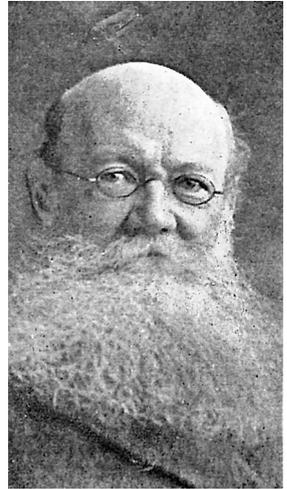
フリードリヒ・エンゲルス(一八二〇〜九五、ドイツの社会主義者)……バルメン(ドイツ中西部)の紡績工場主の子として生まれたが、高校中退後、商業実習に従事。一八四一年軍務のかたわらベルリン大の聴講生となる。のちマンチェスターの工場ではたらくため渡英してから、労働者階級の状態を観察するうちに、社会主義者となった。一八四四年以後、マルクスと親交をむすび、同人を物心両面から支援し、マルクスの死後、その遺稿を整理し公刊した。各国の社会主義運動を指導した。

フェルディナント・ラサール(一八二五〜六四、ドイツの労働運動・社会主義運動の指導者)……プレスラウ、ベルリン両大学で哲学・歴史学をまなんだ。ヘーゲル左派の闘士。弁護士として出発し、労働者の窮乏を、“賃金鉄則”(資本主義社会における賃金は、労働者が生命を維持し、子孫をふやすために得るもので、それ以上にもそれ以下にもならないという理論)を説いた。大衆的な労働運動の基礎をきずいた。が、のち決闘により死亡。

ヴィルヘルム・リーブクネヒト(一八二六、一九〇〇、ドイツの社会主義指導者。ジャーナリスト)……政治運動により大学から追放された。一八四八年ドイツ革命に参加し、スイスやイギリスに亡命し、マルクスやエンゲルスを知り、社会主義者となった。反軍国主義闘争、普仏戦争のさいの反戦活動により投獄された。一八六九年マルクス、エンゲルスとドイツにおいて、社会民衆労働党を結成。一八七八年来、社会主義鎮圧法のもとにあつて党をよく指導し、機関紙『人民国家』(のち『前進』に改名)の主筆となる。

ロシア

ミハイル・アレクサンドロビッチ・バクーニン(一八一四〜七六、ロシアの無政府主義者。作家)……貴族の家にもうまれたが、ロシアの専制政治がうむ民衆の惨状をみて激昂した。家庭教師について学んだのち、サンクトペテルブルクの砲術学校で五カ年教育をうけ、士官となるが、ドイツ・スイス・フランスを旅行し(一八四一〜四七)、政府の帰国命令にしたがわず、財産を没収された。一八四三年パリでブルードンと交り、無政府主義者となった。一八四八年ドレスデン暴動を指揮したが逮捕され、ロシア政府に引きわたされ、シベリアに終身流刑となった。しかし、一八六〇年脱走し、日本、アメリカ経由でロンドンにおもむき、第一インターナショナルに参加した。が、好戦的な思想ゆえに、マルクスやエンゲルスと対立し、追放された。ベルリンで没した。バクーニンは、身分・富をかるんじ、いっさいの権威を攻撃した。神や国家を否定し、暴力革命を鼓吹した。



晩年のクロポトキン

ペーテル・アレクセヴィッチ・クロポトキン（一八四二―一九二一、ロシアの地理学者・社会思想家・革命家）……貴族の家に生まれた。が、父がもつ農奴の惨状を正視できず、⁽¹²⁾ 貴族の特権をすて弱者の擁護者となった。当時、地主の富は、農奴の数によって計られ、かれの父は三カ所の領地に、一二〇〇名の農耕労働者をもっていた。⁽¹³⁾ シベリア、フィンランド、満州で地理学的調査をこころみた（一八七二―七三）。⁽¹⁴⁾ が、外遊してバクーニンの運動に参加し、無政

府主義者となり、帰国して入獄。釈放後、国外で暮らし、ロシア革命後帰国したが、ボルシェヴィク派と考えがあわず、田舎でくらし。

アメリカ

ヘンリー・ジョージ（一八三九―一九七、アメリカの社会思想家・経済学者）……フィラデルフィアの貧しい家に生まれ、初等教育をうけたのち、⁽¹⁴⁾ 仕・船員・印刷工となり、のち出版業に従事した。後年著述家となり、貧困と発展との関係について考えるようになった。――土地の価値の増大と貧困は、比例している。土地の価格は、貧困層の経済状況における格差をしめすものである。ますます多くの人間が、土地私有制のなかでくらすと、家賃はあがり、土地の価格も上昇する。最低賃金のまま、生活費はかさんでゆく。人口集中がつづく⁽¹⁴⁾と、土地の値段も家賃もあがりつづける。⁽¹⁴⁾ 土地はあらゆる富の源であるから、土地所有制を全廃して、それを公有にすることを説いた。

共産主義、社会主義の究極の目的は、貧富の差をなくすることであった。ヘンリー・ジョージは、その書『進歩と貧困』Progress and Poverty（一八八〇年）のなかで、「社会は機械ではなく、有機体（生活機能をそなえている組織体。生物）である」（二二八頁）といい、社会という体が、よく発達してゆく必要性をといた。その目的を達成するには、財の私有を廃することであった。

その主義に走った者は、貧民救済の精神に富み、ときに私財や生命をすて、それらにまいしんした。かれらを総じて社会主義者という。

これらの思想は、後述するように、明治初年にわが国に移植されたが、それを翻訳的に輸入したにすぎなかった。⁽¹⁵⁾ それまでわが国に共産主義Ⅱ 社会主義の萌芽（きざし）が、まったくなかったかという点、多少それに近いものがあった。

既ニ歐洲ニモ往古希臘ノ盛ナ時
分之ニ類シタ制度モアリ。又其後ニ至リテハコ
ムニクスメデヤノ。或ハソシアリスムヲ採申ス。二
派ノ經濟學が起リテ。二派少々異トル所ハアレ
ト先バ大同小異デ。今日天下億兆ノ相生養スル
上ニ於テ。衣食住ヲ始メ都テ今日ノ事ヲ何事ニ
ヨラズ。一様ニシヤウト云フ論テ。

加藤の『真政大意』(明治3・7) 卷1, 15頁にみられる原文

七世紀——大化改新ののち施行され、九世紀なかば(平安初期)——土地私有の發達により実行不可能となるまで実施された、土地制度法(班田収授法)がそれである。これは唐の土地制度法(土地公有制)の原理を参考としたもので、六歳以上の男女に適用された。良民男子は一人二段(段は面積の単位——一段は三〇〇歩ほど)、女子はその三分の一の田地(口分田)をあたえられ、これを耕作させ租税源とした。死亡すると国に返した。口分田は六年ごとに与えられることになっていたが、じっさいは十二年になることもあった。

また江戸の中期・後期には、安藤昌益(一七〇三〜六二、医者・思想家)のように、一種の共產主義的な思想をいだいた者があらわれた。かれはじぶんが生きている時代を“私法盗乱の世”といい(「自然真営道」)、その社会を法世(身分階級の社会)とよんだ。かれは支配階級の居食(みずから耕さず、他人の作物をくらい生活する)を否定し、君主といえども民とともに耕すべし、といった考えに近いものをもっていた。かれは搾取と支配のない共產社会を理想とし、“国のしらみ”(寄生者——王や聖人といった支配者、僧侶・学者・商人)を唾きした。

一 コミュニクスメ ソシアリスム の紹介者 加藤弘之

わが国において、共產主義、社会主義のことばや思想をはじめで紹介したのは加藤弘之(一八三六〜一九一六、明治期の啓蒙的官僚学者)であったことは、こんにちかなりよく知られている。かれは自著『真政大意』(上下二冊、谷山楼蔵梓、明治3・7)のなかで、立憲治下におけるじっさい政治の原理をといた。が、この中にすこし変な呼び方であるが、

コムミュニスム
ソシアリスム

といった語がでくる。

これらの呼称は、何語なのか、はっきりしない。が、おそらくフランス語の Communisme や Socialisme をよんだものであろう。またこれらの語は、日ごろ繙読しているドイツ書のなかで見いだしたものと考えられる。加藤に



『真政大意』(明治3年)をかいたころの加藤弘之(35歳)。

よると、この二語が表わすものは、「経済学」だというのが、こんにち的な——経済の事象やその構造を研究する学問の意ではなく、どちらかといえば「政治学」(国をおさめ、民をすくう研究——経世剂民)の意味で使っているようだ。つぎにこれらの語が出てくる一節をかかかみよう。原文は漢字とカタカナの混交文である。

既^す二^に欧州^{ヨーロッパ}ニモ 往古^{おうこ}希臘^{ギリシャ}ノ盛^{さか}ンナ時^じ分^{ぶん}。之^{これ}ニ類^{るい}シタ制度^{せいど}モアリ。又^{また}其^{その}後^ごニ至^{いた}リテハ コム^こミュ^むニス^にス^スメ チヤ^ちノ。或^{ある}ハソ^そシア^しリス^りス^すメ杯^な申^まス。二^に派^はノ^の経^{けい}済^じ学^{がく}ガ起^おリテ。二^に派^は少^{せう}々^{じょうじょう}異^いナル所^{ところ}ハアレドモ 先^まツハ大同^{たいどう}小^{せう}異^いデ。今^{こん}日^{じつ}天^{てん}下^か億^{おく}兆^{ちやう}ノ相^{あい}生^{しやう}養^{やう}スル上^{うへ}ニ於^{おい}テ。衣^い食^{じき}住^{じゆ}ヲ始^{はじ}メ 都^{すべ}テ今^{こん}日^{じつ}ノ事^{こと}ヲ 何^{なに}事^{ごと}ニヨラズ。一^{いち}様^{やう}ニシヨウト云^いフ論^{ろん}デ。

注・ルビと注は引用者による。

《大意》

すでにヨーロッパにおいて、大昔ギリシャが栄えたころ、これと似た制度があった。またその後コムニスムとかソシヤリスムといった経済学が二つ起った。この二派はすこし異っているが、だいたい同じものであり、細かい点だけがちがっている。こんにち天下の万民を養ううえで、衣食住をはじめ、何でも同じにしようとする考えである。

加藤は当時まだ Communisme や Socialisme といったことを日本語に訳すことができず、原語をそのまま使わざるをえなかった。だから語義だけを説明するにとどまっている。

このあとにつづく加藤の文章の一節は、さらに両語をやゝくわしく説いたものである。その要点を意識すると、つぎのようになる。——人には才能にめぐまれた者とそうでない者がある。勤勉な者となまけ者がある。それが貧富の差を生むのである。富者(富んでいる者)はますます豊かになり、貧者はますます貧乏になる。四海(世のなか)の困窮も、この点から生じる。

衣食住をはじめ、私有の土地、器物、産業までも人まかせにしないで、政府で世話(監理)し、貧富の差をなくそうというのである。加藤は共産主義や社会主義の思想に賛同せず、むしろ反対者として批判した。

加藤について西 周（一八二九〜九七、明治期の啓蒙的官僚学者）も西洋文献（英書——書名は不詳）において見いだした。

Socialism (英) 会社之説

注・会社とは結社の意か。

Communism (英) 通有之説 私有ヲ廃シ通有トナス

注・西の「百学連還覚書」（第二冊）より。

の語（英語）に言及している。その時期は明治三年から同六年（一八七〇〜七三）とみられる。かれも加藤とおなじように、これらの二語をうまく訳せなかったようで、既述のように変な日本語をあてている。

Socialism の訳語「会社之説」は、いうまでもなく今日的な意味あいをもっていない。会社とは同志のあつまり——結社ほどの意である。Communism の訳語「通有之説」はわかりにくい。が、「私有ヲ廃シ通有トナス」は、なんとか理解できる。「通有」という語句は、漢和辞典にみられない。おそらく西の造語であろう。この語を分解すると、「通」はすべてくるるの意、「有」はもつ意であるから、ぜんたいの意味は、まとめて一つにする。つまり、財を一つにすることであろう（共産主義）。

西の「百学連還覚書」（第二編下）に、これらの二語を言いかえた説明がみられる。

第九 Socialism. 英の Robert Owen なる人の説にて、政府たるものを廃止し、農工商悉く各其会社を結びて 以てこれを世界中に及ぼし 国を建てむと欲せしなり。元来此人は貧なりしか 会て水車の会社を建て、大に富をなせしより起る所の説なり。

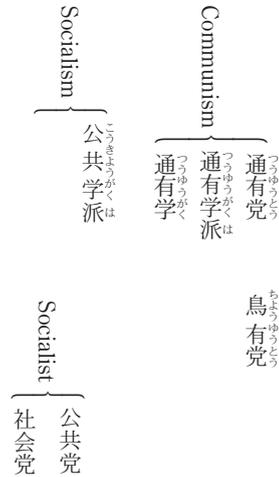
第十 Communism. 即ちソシアリシムの一種にして、仏の St. Simon なる人の説なり。此説は万民各所有となす田地及ひ家財等を合して平均し、相共に生活をなし、以来誕生せる人に随ふて 悉く相分て平均し、国を立むと欲せしなり。会て自から党を結びて試ミしか、終に貧するに至れりとす。

注・ルビは引用者による。

Communism (仏) } や Socialism (仏) } にせよ、明治十年前後、まだ訳語が一定していなかった。
 Communism (英) } Socialism (英) }

加藤は明治十二年(一八七九)ごろ、Komunist (独) を「共同党」、Sozialist (独) を「社会党」と訳している(『疑堂備忘 二 明治12・5・27』より)。

西は「社会党論ノ説」(社会主義についての稿本、明治11・6以降)明治12年「一八七八〜七九」ごろの執筆と推定される——大久保利謙)に
 おいて、つぎのように訳している。



また明治十一年(一八七七)から同十四年(一八八二)ごろの諸新聞は、それぞれ原語(「コムニニスト」「コンミューニズム」「ソシヤリス
 ト」)や訳語(「共同党」「社会党」)を使っている。

『東京日日新聞』……………「近時仏京(パリ)を騒擾して大難を起した共同党(コムニニズム)の如きも…」(パリ)コムニョンの騒乱のこと——引用
 者(福地源一郎の「社説」) 明治11・6・6

『東京曙新聞』……………「社会党ノ原因及来勢」 明治12・6・19
 『 』……………「同右のつづき」 明治12・8・6

『朝野新聞』……………「ソシヤリスト為り 一人ノコミニストヲ唱フル者ナキハ…」(論説) 明治12・8・20

『東京横浜毎日新聞』……………「魯西亜ノ諸国ニハ 虚無党 社会党ナル者起リ」(論説) 明治14・1・27

『 』……………「社会党ヲシテ全ク絶滅ニ帰セシムル能ハズ…」「關邪論 第三」所収、明治14・3・27

注・關邪はよこしまな考えをしりぞける意。

『大坂日報』……………『「コンミニユニスム」ノ所説ニシテ 果シテ能ク 實際ニ其目的ヲ達スヘキモノニシテ」(論説) 明治14・7・13

注・林 茂「自由民権論の社会的限界」『国家学雑誌』第53巻第8号所収、昭和14・8その他より引いたもの。

いずれにせよ Socialism (英) をはっきり「社会主義」と訳したものは、⁽¹⁶⁾ 宍戸義知『古今社会党沿革説』(明治15・7) であると考えられ、以降 Socialism は「社会主義」として用いられるようになった。同書の底本となったものは、Theodore D. Woolsey 著 Communism and Socialism in their History and Theory, Sampson Low, Marston, Searle and Rivington, London, 1880 である。

宍戸は、この二語をつぎのように意識した。

コムミニユニスム (訳者いわく 結主義) かりに旧社会主義と訳す)

ソシアリスム (社会主義 かりに新社会主義と訳す)

注・『古今社会党沿革説 卷一』一頁より。

一 明治期の英和辞典にみる Communism の訳語の変せん

一方、わが国の英和辞典にみられる Communism, Socialism の訳語の変せんをみると、『和訳英辞典』(開成所の「改正増補英和对訳袖珍辞書」慶応3)をもとに編んだもの。明治二年刊)には、これらの二語はみられない。しかし、⁽¹⁷⁾ 英和字彙 日就社』(明治6)には、Communism の語をみられぬが、Socialism や Socialist の語をみることができ(一〇八一頁)。

Socialism……交際（まじわり、つき合いの意——引用者）ノ理^リ。衆用^{シウヨウ}ノ理
Socialist ……交際ノ理ヲ主張^{シヒキヤク}スル人

明治十七年（一八八四）から同二十年（一八八七）ごろになると、いまわれわれが用いているような語義にちかい。

『尺振八訳 明治 英和辞典 六合館蔵版』（明治17）

Communism……（名）財産共有主義。共産主義

Communist ……（名）共産主義ヲ主張スル人。共産主義ヲ実行スル人

注・同辞典の二一〇頁。

『柵橋一郎訳 英雙解字典 丸善商社蔵版』（明治19）

Communism……家産^{カサン}（一家の財産、身代の意——引用者）ヲ共同^{キョウドウ}ニスル^{こと}

S. Community of Property^{*}

Socialism ……衆用^{シウヨウ}之理^{ノリ}。交際^{コウサイ}之理^{ノリ}。社会論

S. a community of Property

Socialist, S. ……社会党^{シヤクワイトウ}

one who supports socialism

* community は“共有”の意。この句は、“財産の共有”を意味する。

注・同辞典の一三五頁。

『島田^{不明}纂訳』^{附音} 和訳英辞彙 大倉書店蔵版』（明治20）

Communism……………共産論

Communist……………共産党

社会論 交際ノ理

Socialism n……………共産論

Socialist……………社会党 共産論ヲ主張スル人

注・同辞典の一五三頁。

明治維新は、一種の社会主義革命とみる事ができようが、共産主義、社会主義がひとつの政治運動として認識されるようになったのは、明治十年代であった。¹⁷⁾

一 日本における社会主義運動の萌芽

——「東洋社会党」

わが国の小さな社会主義運動の芽——原始のすがた——として無視できないのは、反逆となにかと縁のふかい九州島原町（雲仙岳のふもと）の江東寺で旗あげした「東洋社会党」のことである。明治十四、五年（一八八一〜八二）にかけて、わが国に急進主義的な政党が二つ生れた。

自由党……………板垣退助や中島信行を中心に、士族・地主・資本家・知識人らを基盤に明治十四年に結成された。が、同十六年（一八八四）政府の切りくずしにあい、解党。

立憲改進黨……………大隈重信や犬養毅・尾崎行雄らを中心に、三菱らのブルジョア、知識人らを基盤に、明治十五年（一八八二）に結成された。

これらの政党が勃興したとき、その波にのったかのように誕生したのが「社会党」の名を冠した奇異なる政党——東洋社会党である。

貧富を平均することは天道であり、かつ社会の大本（おおもと）とする、ひじょうに過激なる党派が現われたという。それを記事にしたのは干河岸貫一である。題して「東洋社会党の現出」という（『仏教演説集誌』10号所収、明治15・6・14）。

注・吉野作造「東洋社会党のこと」（『新旧時代』第1年第7冊所収、大正14・9）。

東洋社会党の党首は大和国（現・奈良県）の材木商兼農民・樽井藤吉（一八五〇〜一九二二、32歳）であった。ほかに赤松泰助という人が発起人として名をつらねた。樽井は、材木屋の若だんなに生まれた。とくに正規の教育をうけたことがなかったが、独創のみに富み、よくものごとを緻密に考える人であった。

早くから国家社会主義的な考えをいただき、上海にあそんだとき、一宣教師に会い、そのとき西洋の社会主義、社会党のことを耳にしたらしい。

明治十五年（一八八二）五月二十五日——島原町の江東寺において第一回目の大会をひらいた。来会した者は数百名というが、じっさいは七、八十名であったという。その綱領（方針、主張を書きならべたもの）は、

第一条 我党は道徳をもって言行の基準となす。

第二条 我党は平等を主張となす。

第三条 我党は社会公衆の最大福利を目的となす。

といったもので、とくに社会主義的理論の根拠はなかった（立山隆章著『日本共産党検挙秘史』武俠社、昭和4・11、八頁）。

大会の勢（へま）とう党名をきめるとき、過激の徒も多く入っているため、議場は紛糾した。立憲急進党がよいとか、何か突飛な（人があつとおどろくような）ものがよいとか、いろいろ名称があがったが、けっきょく「東洋社会党」に落ちついた。

党主をはじめ参加者は、クロポトキンやマルクスのことを知らなかったであろうが、その旗あげは、すくなくとも日本の社会運動の先駆をなしたものと見ることができるとい（18）党則は、——第一章 綱領、第二章 手段、第三章 盟約、第四章 組織——から成るのだが、「第三章 盟約」ちゅうの文章に、

予カ脳裏ニ 予ヲ制スルノ君主アラス。予カ奉スル所ノ君主ハ 一ノ道義（人のふみ行うべき正しい道）ノミ。

注・指原安三編輯『明治政史』第六冊、富山房発兌、明治25・11、一三三三頁より。

というものがみられる。木村 毅（一八九四～一九七九、明治・大正期の評論家・明治文化研究家）の「明治前半期の社会主義思想と社会運動」〔五 東洋社会党〕所収、六三頁）では、「君主」の語は、検閲によってけずられ、

予が脳裏ニ予を制する××あらず。予が奉ずる所の××は一つの道義のみ。

となっている。君主とは統治者、天皇のことである。

「予ヲ制スル君主アラス」（わたしを押えつける天子はいない）といった点から、この党は無政府主義の結社だという（石川三四郎談）。江東寺に散集した者の多くは、おそらく資産をもたない、労働賃金だけで生活する階級（無産者）であつたらうから、東洋社会党は、日本で最初の無産政党とみることができよう。

しかし、この新興政党は、同年六月治安を妨害するものとみなされ、結社・集会を禁じられた。党首の樽井は、集会条例違反により、一年の軽禁錮（監獄に拘留するが労役を科さない）を言いわたされた。内務卿が県令に命じた処置である。木村 毅が昭和二年（一九二七）八月、島原半島を旅行し、当時この党に参加した生存者・宮崎百八郎に会い、追懐（おもいで）を聞くことができた。それによると、東洋社会党というのは、九州改進黨の党主が、島原半島の青年を刺戟してできた結社であつたという。

樽井はのちに代議士に当選し、国家社会主義的な見地から『国有鉄道論』を著わし、また『明治維新発祥記』（大正8）を刊行したが、晩年はふるわず、故郷で落魄の生涯をおえたようだ。

明治二十年（一八八七）十月——自由党员（自由民権派）の三大建白事件（地租軽減、言論集会の自由、对外条約の改正をもとめる運動）は、

いっとき世論を高揚させたために、政府はあわてて「保安条例」（明治20年12月にだされた反政府運動弾圧法）をもってのぞんだ。この法規のなかで奇抜だったのは、内乱をたくらんんだり、治安を妨害する行動にでたとき、皇居の三里外に追放されることであった。そのため建白のため在京中の尾崎行雄・片岡健吉・中江兆民・星 享ら五七〇名は、退去命令をくらった。

終始、民主主義のたちばから、明治政府の専制的推移に抵抗した植木枝盛（一八五七〜九二、明治期の思想家・政治家）は、人の「自由の権」というものを尊重した。それは天から人にあたえられた宝であり、自由の権利がないと、生きていてもしょうがないという。幸福も安楽も自由がないとえられない。国家は政府によってできたものでなく、人民があつてできたものである。

命や才力があっても、自由がないと、みな無用の長物。ひとはじぶんのことや一家のことだけを考えるのでなく、ひろく国のこと、世の中のことに注意をむけねばならない。国事（二国の政治）のことを対岸の火事のごとく見、政府をおそれ、その命令をよいとも悪いともいわず、ひたすらそれに従い、怒らず、うらまず、卑屈の奴隷になるのは、国家の良民のすることではない。それに満足するのは、死んだ民なのである（植木枝盛「民権自由論」）。

一 サンフランシスコの「愛国有志同盟」

やがてこのような自由党系の土佐派志士のあおり行為（煽動）に感化された一部の気骨にみちた青年らの眼は、言論の自由な国アメリカにむけられ、故国よりカリフォルニアへと旅立っていった。かれらは日本国内での不自由な政治運動への不満から、自由の国アメリカで政治運動をつらぬこうとし、憲法が發布される前年——明治二十一年（一八八八）一月七日、サンフランシスコにおいて「愛国有志同盟」（のちの「日本人愛国同盟」）なるものを結成した。

この結社は自由主義を基礎に、政治について論じ、日本の将来を改良する、といった高まいた理想をかかげて発足したものであった。その方針としたものは、——

一 演説討論会をひらくこと。

一 新聞を発行すること。

一 本国（日本）の有志らと気脈を通じること（ひそかに連絡をとり、気もちを通じさす）。

注・蛭原八郎「桑港^{オウカウ}日本人愛国同盟始末——主として其^{その}機関紙を中心に」『刊季 明治文化研究 第二輯』所収、昭和9・5より。
*桑港とは San Francisco の訳語。「聖仏蘭西斯科」と書くばあいもある。

アメリカに渡った血気さかんな急進派闘士は、ただ政治活動をするためだけに異国に旅立ったわけでない。かれらは現地において労働に従事し、ときに人種差別、排日などに耐えながら、所期の目的を達成しようとした。

二十前後のむこうみずの若者らがついた職業は多岐にわたり、主なるものはつぎのようなものであった。

家内労働

学^{スツルボイ} 僕（料理づくり、掃除、洗たくなどをし、学校へ通う者）、レストランや旅館・商店・下宿屋の掃除人、皿洗い、小使い。

都市近郊での屋外労働

農夫（野菜、じゃがいも、くだもの作りなどに雇われた者）、鉄道・鉱山・製材所における就労者。

機関紙については、愛国有志同盟^{アウチウシテイメイ}が結成される四ヶ月まえ、早くも自由党系の若者らによって、オークランド（カリフォルニア州西部——サンフランシスコ——の東約三〇キロに位置）において、ガリ版刷りの週刊紙『新日本』が刊行された。いうまでもなく、同紙は日本政府の政策を攻撃する目的で創刊されたものである。が、創刊からわずか二ヵ月ほど経った同年（一八八八）二月、第十六号をもって廃刊となった。

しかし、同紙が廃刊になるまえ、『第十九世紀』と題する『新日本』とおなじ体裁のかなり過激な小新聞が発行された。この新聞はうまく検閲の目をのがれ、二年間ほどつづいた。愛国有志同盟の機関紙は、ひんばんに創刊と廃刊をくり返すが、その変遷をしるすと、つぎようになる。

〔新聞紙名〕

〔存続期間〕

〔発行地〕

『新日本』……………明治19・9・8～同21・2 オークランド

『第十九世紀』……………明治21・1～同22・11 東京

『自由』……………？ ～同24・7



『愛国』(Ai Koku) 1892 (明治25) 8・5

注・内地輸入禁止にあつ。

『革命』……………明治24・9

注・題がわるいので一号かぎり禁止となる。

『愛国』(AIKOKU)……………明治25・8〜同年11・26 サンフランシスコ

(月刊の小新聞、『愛国』の代用)

『小愛国』……………?

『第十九世紀新聞』……………明治26・1〜?

注・月二回発行の大新聞。

太平洋のかなたカリフォルニアのオークランドで発行した週刊紙『新日本』を日本に持ち込もうとして逮捕されたのは、和歌山県人・畑下熊野であった。明治二十一年(一八八八)三月下旬——かれは帰国した折、吉原の「玉屋」に登楼し、翌朝青楼を出ようとしたとき、警官に取りおさえられた。取りしらべの結果、重禁錮五ヵ月罰金□の刑となり、収監された。新聞紙条例第二十一条(明治20・12改正)違反として、罪科を問われたものである。

日本政府は、外国で刊行される邦字新聞にたいしてなら制裁(刑罰)をくわえることはできなかった。が、内地に輸入されたものにたいしては、

もしそれが治安を妨害し、風俗を乱すものであれば、その発売頒布を禁じ、差しおさえることができた。畑下は国事犯であったが、大日本帝国憲法の発布(明治22・2)にさいして、恩赦により釈放された。

当時、サンフランシスコには、四千名ほどの日本人がいたようである。明治二十年代、当地で発行された邦字新聞につきのようなものがある。

発行部数は、百部ほど。

桑港新報……明治22・2創刊の政論抜きの文芸新聞。ながくはつづかなかつた。

桑港新聞……明治24年の創刊の日刊新聞

金門日報……明治24年の創刊の日刊新聞

注・前掲、蛭原論文より。

北米にはじめて足跡を印した日本人は、おそらく漂流民であろうが、たしかな記録がないため、つまびらかにできない。万延元年（一八六〇）には、新見正興の遣米使節団、咸臨丸の一行がサンフランシスコを訪れている。元治元年（一八六四）には、オランダの宣教師につれられた二名の学生が渡米したという話がある。北米に日本人が移民として住むようになったのは、明治初年からである。日本人労働者の人口の推移は、つぎのようである。

明治2年（一八六九） 2月～10月……オランダの貿易商・会津藩軍事顧問ヘンリー・スネルは、会津の農民約四〇名を渡米させ、カリフォルニアのゴールドヒルに入植させ、茶の栽培を試みたが、熱病にかかる者が続出し、また金鉱より流れでる鉱毒によって茶の苗木は育たず事業は失敗した。スネルはいずこにか逃亡した。日本人は四離分散した。

同4年（一八七一）……カリフォルニアの在留日本人は五〇名前後。
7年（一八七四）……男 六八名

女 八名 幼児四名

注・サンフランシスコ総領事高木三郎の報告による。

11年（一八七八）……約二〇〇名。
17年（一八八四）……約四二〇名。
19年（一八八六）……約五〇〇名。

注・これらの数字の中には、脱船者・外国船の乗組員・外国の従僕などをふくむ。

日本人が内地における政治上の理由や貧困から、労働者や従僕（苦学生）として渡米するようになったのは、明治十九年以後のことらしい。日本人労働者は農園や鉄道方面のしごとにおいてひじょうに歓迎され、年をへるごとに移民の数はふえていった。

明治22年（一八八九）……約二万三〇〇〇人（カリフォルニア州）

約二〇〇〇人（オレゴン州）

約三〇〇〇人（ワシントン州）

約一〇〇〇人（ニューヨーク州付近）

39年（一九〇六）……約七万三〇〇〇人

40年（一九〇七）……約八万九〇〇〇人

43年（一九一〇）……約九万二〇〇〇人

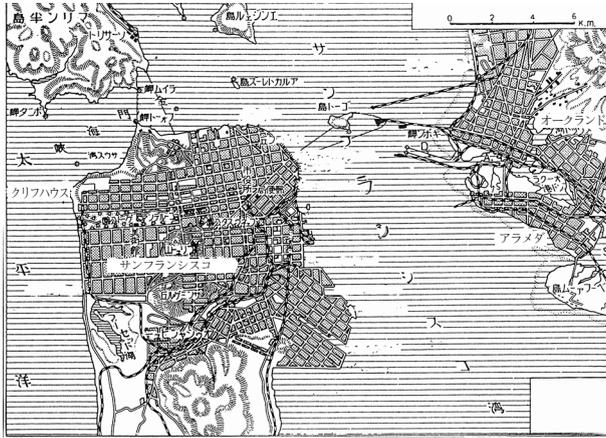
（全米で。）

注・竹田順一著『在米広島人史』在米広島県人史発行所、昭和4・6を参照。

一 カリフォルニア州における幸徳秋水

幸徳秋水（一八七一～一九一一、明治期の社会主義者。のち大逆事件に連座し、刑死）は、『平民新聞』（第52号）の筆禍事件により、明治三十八年（一九〇五）二月巢鴨監獄に入り、同年七月出獄した。かれは釈放後保養をかねて渡米した。が、アメリカ滞在に無政府主義の感化を受け、帰国するさいに「社会革命党」を結成した。在米ちゅうに何らかの思想転換があったとみられている。

幸徳は入獄ちゅうに健康を害したばかりか、出獄後かれを待っていたものは、平民社の解散と失業であり、おまけに家をうしない、宿なしになったことである。かれは手負いの落人がしばしの隠れ家をもとめて逃げるように、アメリカにむかう貨客船（伊予丸）にのった。洋行するとなれば、大金がいるが、友人・知人らが三〇〇円、五〇〇円、一〇〇〇円、二〇〇〇円と費用をだしてくれた。九〇〇〇円をこえる金があつまったが、出獄後の生活費、妻の生活費、おい幸衛の船賃などを支払ったら、手元に



サンフランシスコとオークランド

三〇〇円（米貨一五〇ドルに相当）

残った。かれはこの金を旅費と滞米ちゅうの生活費にあてた。ほかに加藤時次郎（一八五九〜一九三〇、明治・大正期の医師。「実費診療所」、「実費調剤所」、「平民病院」、「平民パン製造所」などを創ったことで知られる社会運動家。週刊『平民新聞』を財政的に援助した。）より、渡米ちゅう毎月五〇円の送金を約束された。⁽²⁰⁾

明治三十八年（一九〇五）十一月十四日——午後二時、横浜の埠頭に同志らが「赤旗」（労働者の旗）を立てて見送りにおとずれ、やがて汽笛がなると、伊予丸はゆっくりとうごきだした。そのとき

——幸徳君万歳！ 社会党万歳！

の声があがった。数十名の男女の見送り人のなかに、幸徳の妻、堺夫人、木下のめいなどの姿があった。

甲板のうえにいたのは、

幸徳秋水（二等船客）

幸徳幸衛（秋水のおい、三等船客⁽²¹⁾）

西沢八重子（岡 繁樹夫人「敏子」の友人）

ら三人であった。船はじょじょに遠ざかるにつれて、陸のひとびとの姿がみえなくなり、ただ打ちふる「赤旗」だけがはっきりみえた。

船は観音崎（三浦半島東端）をすぎ、大洋に出るころになると、動揺がはじまり、船よいのため二、三日は食事もろくにとれなかった。

船よいになれば、食堂に出て、食事がとれるようになったのは、横浜を出帆して一週間ほど経ってからである。船中での生活は、衣食の競争のないものであり、社会主義の社会であったという（「渡米日記」）。

数千トンの伊予丸も、大洋のなかで動揺がはじまると木の葉のようであった。幸徳は波がおだやかなとき、クロポトキンの自伝（英文）やマルクスとバクーニンの衝突についての評論などをよんで、ぶりょうを慰めた。

十一月二十五日——横浜を出帆して十四日、ヴィクトリア港に着く二日まえの夜——船内では演芸会が催された。二十八日、ヴィクトリア港（カナダ・バンクーバー島南東部）に到着し、翌二十九日の午後一時ごろシアトル（アメリカ西部——ワシントン州の港）に入港した。十七日間、空と海だけが目に入る単調な船旅から、はじめて陸地をみたとき、ほとんど蘇生の思いがしたという（「狂瀾余沫」）。

幸徳とおいの幸衛、加藤時也⁽²²⁾は、おなじ船に乗っていた大橋円三郎という人の案内で、「帝国旅館」に投宿することにした。西沢八重子女史は、ミス・ファイフの案内で洗礼教会の婦人ホームへむかった。

毎日、幸徳が泊っている旅館のほうに有志や青年学生らが押しかけて来た。せまい一室にテーブルをかこんですわり、イスのない者は、壁にもたれて立ち、あるいはベッドのうえにすわり、談論した。

十二月一日——夜、幸徳のために日本人会堂で演説会がひらかれた。会堂に行ってみると、正面に御親影（天皇・皇后の写真）、その左右には、胸に勲章をいっぱいぶら下げた東郷や乃木大将らの肖像がならび、横の壁には、伊藤博文の扁額（よこに長い額）がかかっていた。幸徳はそれらを入口から一見すると、おもわず微笑した。

国家の法規をみだし、浪々の身となった者が、非戦争論、社会主義論について話をするに至ったのと、おかしなコントラストだとおもった。

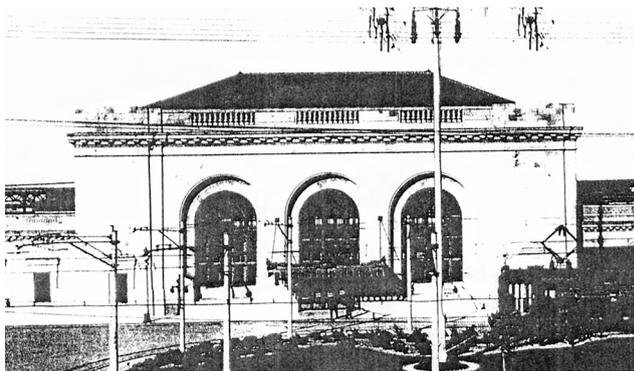
会堂には聴衆が五〇〇人ほどもいた。そこには警官も私服もいなかった、というが、のちにオークランド、サンフランシスコにおいて、日本総領事館の密偵が、かれの身边にうるちよろするようになる。が、本人はそのことに気づかなかったようだ。幸徳は「日露」戦争後の日本」という演題で一時間半ほど話をした。が、昨年二月以来の沈黙をやぶっての講演であったから、胸のつかえをすっかりはき出したような気がした。

夜、宿のほうに青年学生らが多数やってきたが、その中に社会主義者や社会主義について勉強ちゅうの者がいることを知った。

幸徳はシアトルに四日滞在したのち、十二月三日の夜十時——同地を発し、陸路オークランド（当時は人口一〇万人ほどの市）にむかった。おいのことをシアトルの友人・村上白洋にたのみ、



1904年（明治37）当時のオークランドの地図。



幸徳らが下車した「16番街停車場」(オークランド)の図。
Public Library in Oakland 蔵。

といっしょにサザン・パシフィック鉄道の夜汽車にのった。二昼夜、のりつづけ（「桑港より」、五日の点灯すぎ（夕方のことか）オークランドの 16th St. Depot（「十六番街停車場」）に到着した。汽車をおりて、混雑のなかをま（ま）ごしていると、「ヤー」と大きな声を発しながら駆けて来て、花束をさしだした男がいた。その者は、じっこの間柄の平民社のサンフランシスコ支部の岡 繁樹（二八七八〜一九五九、土佐高知出身、

文筆をよくする無政府主義者、元『万朝報』の記者、享年八十一歳)であった。

出むかえ人のなかには、岡夫人(敏子、旧姓山本——東京女子職業学校の出身⁽²³⁾)や鷺谷精一(『日米』新聞の記者。当時二十六、七歳)らがあり、やがていっしょにフェリーに乗り、十五分ほどするとサンフランシスコの埠頭(Union Ferry Depotのことか)に着いた。ここにも大勢の同志十余名が幸徳らを待ちかまえていた。

岩佐佐太郎(千葉県長生郡茂原町のひと。東京法学院(現・中央大学)か、明治法律学校(現・明治大学)の卒業生? 白人方にコックとして雇われ、パークレーに住む。のち日本アナキスト連盟会長)

市川藤一(当時、コロラド州ダンナー二十番街一二三番地に在住か。わざわざコロラドから幸徳に会いに来たものか)

中沢次郎(不詳)

倉持善三郎(茨城県猿島郡杵掛村のひと。猿島郡立農学校を卒業後渡米。サンフランシスコで雑誌発行の助手をやっていた)

このとき出迎えた同志の中には、名士である幸徳をはじめ見る者もいたであろう。幸徳その人は、五尺にみたぬ四尺八寸(約一五〇センチ)ほどの小柄な人であった。あだ名は「しぶ姉」。黄褐色の容貌にヒゲをはやし、細い声の持主であった。皮肉っぽいところがあった。

初対面のとき、不愛想であり、冷たく、とっつきにくい人であつたらしい。

ひとつには、多年密偵がついていたから、人にたいする警戒心がつよく、用心して、内気な態度をとったものと想像される。しかし、すこし付きあいができ、飲みくいする仲になると、おもしろい話、だじゃれなども、飛び出たという。そこへいくと、おなじ社会主義者の堺 利彦などは、あけすけの性格であり、初めてあつた人でも、十年の知己のように胸きんをひらき、高笑いしたから、だれからも愛された。

かれはいつも弱い立場の人間——失意落魄^(やくはく)の人(おちぶれた人間)にふかい同情をよせていた。その姿勢は、終生かわらなかつた。堺の唯一の日記『三十歳記』に、つぎのような文章がみられるという。

——人は皆、窮^(きつ)せる時(こ)まったり、貧しいとき) もっとも親^(した)しむべき也^(なり)。



[左はし] A. ジョンソン
[右はし] 幸徳秋水
『大逆事件アルバム—幸徳秋水
とその周辺』日本図書センター、
昭和57・4より。



正面の建物—「平民社 サンフランシスコ支
部」(ヘイズ街680番地)

—— 貧困の交りを忘れざる 志を表現がためなり。

『寒村自伝』上、「対談 革命家の群像」『現代日本記録全集 11 革命の道』所収、筑摩書房、昭和44・4を参照。

ともあれ幸徳のすがたをみて、まっ先に手を差し出したのは、無政府主義者のアルバート・ジョンソン老人(サンフランシスコとオークランド
を行き来する蒸気船の元火夫)であった。それまで写真と手紙だけをやり取りする間柄であり、会ったことはなかった。ほかにロシア人の革命家
ローズ・フリッツ(当時四十歳台、産婆で未亡人)が出迎えた。

やがて幸徳は、出迎えの同志とわかれると、岡夫妻をとめない、西沢女史を東西社の竹下 浩(オークランドの八番街二八二番地 282 8th St.
Oakland)のもとに送り、晩さんをそこで喫したのち、ふたたびサンフランシスコにもどり、はじめて「平民社サンフランシスコ支部」(ヘイズ
街六八〇番地 680 Hayes St. San Francisco、建物は現存)を訪れた。東京における平民社は政府の命により解散させられたが、当地の支部の入
口には、黒板に英語と日本語で、「平民社サンフランシスコ支部」の看板がかかっていた。

平民社は、異国においてまだ解散もしないで、存続していたのである。幸徳はその看板をみて、ひじょうにゆかいな気持になった。平民社の支
部が置かれている建物は、サンフランシスコにおいてよくみられる縦ながのヴィクトリア風の建物(二階建)である。



[左] 娘
[右] ローズ・フリッツ女史

平民社は、

十二畳ほどのひろい部屋が二つ
ひろい食堂一つ
小部屋一つ
バスルーム一つ
客室一つ

から成っていた。幸徳は加藤時也とひろい方の部屋に泊まることにした。

その建物は共同住宅のようなもので、つぎのような人びとが住んでいた。

せまい一室に……岡 繁樹夫婦

?……………堺さかい為子の弟・延岡常太郎

?……………二、三名の同志

十二月六日、夜同志の青年らの小集会を平民社でひらき、今後の運動方針などについて話しあった。翌七日、ジョンソン老人宅（リリ通り四一四番地 Lily Aven. 414 平民社から歩いて四、五分のところ）における茶話会に招かれた。列席したのは、

ローズ・フリッツ Rose Fritz 女史（キエフ出身のロシア亡命者、無政府主義者。一八八〇年代にサンフランシスコにきた。産婆をへてのち歯科医(25)になった。）とその娘（十七歳）

キッター（無神論者、雑誌記者）

岡夫妻

加藤時也

西沢八重子女史

西条（サトル？）

渡辺

らであった。当日のあつまりは、なかなかぎやかなものであったらしい。

八日、鷺谷精一の案内でゴールデンゲート公園^{パーク}にあそんだ。九日、当地の社会党员エイテルという者の来訪をうけた。夜、帝国ホテルで『日米』新聞記者らによる晩さん会に招れた。翌十日も有志茶話会がおなじホテルで開かれ、五十余名が出席した。このとき、当地の社会党の組織者^{オルガナイザー}ジョージ・ウィリアムズがやってきた。

この日、平民社から歩いて四、五分ほどいった所にあるフリッツ女史宅（オーク街五三七番——537 Oak St. San Francisco、建物は現存）の一室を加藤とともに借ることにした。平民社はクラブとしては適当であったが、人の出入りが多いことや療養の点から下宿することにした。食事は三度とも平民社かキリスト教青年会の台所でたべることにした。

幸徳らの部屋は、上層の二階にあり、その大きさは、十四、五畳ほどのもの。通りに面しており、左の壁の中央にある暖炉のうえには、クロポトキンの大きな肖像画が、右の壁には同じ大きさのバクーニンのものがかけてあった。他には風景画のような額がかかっていた。また暖炉のうえの柵には、ゴルキーやゾラ、クロポトキンなどの著作や写真などが置かれていた。

幸徳はこの家で四ヵ月半くらすのであるが、故国（日本）では、「ロシアの革命女」と同棲しているといったうわさが生じた。が、二人の間には同志愛以上のものはなかったという（カール・ヨネダ「幸徳秋水の在米時代」『幸徳秋水全集』第七卷 附録 所収、昭和44・2）。幸徳が当時ロンドンにいたロシアの革命家クロポトキンと文通するようになったのは、フリッツ夫人の紹介によるものであった。

フリッツ女史のこの家は、Lily Avenue（リリ街）に住むジョンソン老人の家と背中をあわせており、うら口から往来できた。幸徳はカゼのためノドをいため、数日外出しなかった。十四日の夜、エイテル氏方における社会党の小さな集りに出席した。出席者は三十名ほどであった。



真中の建物がローズ・フリッツ女史の家（オーク街587番地、サンフランシスコ）— 3階左はしの部屋が幸徳の下宿先。

ことを、一時間半ばかり話をした。

幸徳の演説がおわると、数十名の同志が立ちあがり、社会主義の歌——「富の鎖をときすてて、自由の国に入るいま……」をいっせいに高唱した。その耳なれた歌詞を聞いた幸徳は、万感むねに迫るを禁じえなかった。唱歌がおわると、「社会党万歳！」を歓呼し、岩佐が閉会の辞をのべた。

演説会がおわり、来あわせた白人の社会黨員らは、幸徳のところに来て、代るがわる握手をした。かれらは帰りしなに、日本の絵葉書（社会党の名士の肖像が入ったもの）や平民文庫を買ってくれた。

十七日、この日から幸徳は、フリッツ女史につき、何かけいごとを始めているが、それは何なのかよくわからない。おそらく英会話を習いはじめたと考えられる。彼女は普通選挙の無用をいっていた。十八日、幸徳は

西方

池田五六

川崎巳之太郎（じつはサンフランシスコの日本総領事館の密偵）

十六日の夜八時——サター街の「ゴールデンゲートホール」という会堂で、社会党の演説会がひらかれ、四〇〇名ほどの聴衆があつまった。この集会に十数名の白人も出席し、サンフランシスコの社会党幹事ジョージ・ウィリアムズ、同社会党の弁士・C・H・キングらの顔がみられた。

会場の入口で社会主義の「檄文」（民衆への呼びかけ）と社会主義の歌を印刷したものをくばった。まず岩佐作太郎（千葉のひと。過激派のひとり。当時は二十五、六歳の学僕）が開会の趣旨をのべ、そのあとC・H・キングが社会主義の大意をやさしく説いた。つぎに幸徳が、日露戦争後の日本国民の墮落と窮民の状態をのべ、普通選挙と社会主義の実践の急なる

湯川



ジョンソン老人宅（リリ街414番地）

などを、つぎつぎに訪れた。またサンマテオ（サンフランシスコ湾の南西約二〇キロ）に住む陶芸家（？）・河瀬如洞の来訪をうけた。

十九日、『日米』、『新世界新聞』、勸業社などを訪れた。安孫子、鷺津らと昼食をともにした。夜、川崎、湯川、ジョンソン老人らがやってきた。二十日、夜、池田、西方、村井、岡らと下町で晩さんをとった。二十一日、ジョンソン老人宅に晩さんに招待された。そのときサンフォード夫人を紹介された。二十二日、パイン街の福音会（福音派教会）へいき、米田と会った。それより社会党サンフランシスコ本部（ハワード街）を訪れた。中に入ると、数百人も入れそうな長方形の広間があり、左右の壁にはマルクス、エンゲルス、ラサールなどの大きな肖像画がかけられてあった。

そこは一種の社交クラブのようであり、読書をしている者、雑談をしている者、チェスをやっている者などがいた。そこで見た白人は、みな先日演説会で会った連中であり、幸徳をみるや皆いっせいに席をたちゆかに迎えてくれた。夜、ジョンソン老人がやってきた。

二十三日、フリッツ女史がやって来て、大いに統治者暗殺のことを話していった。二十四日、ジョンソン老人宅で入浴した。フリッツ女史の夕食に招かれた。夜、オークランドにおもむき山内権次郎と会った。朝から腸のぐあいが悪い。朝から腸のぐあいが悪い。

十二月二十五日——クリスマスである。朝、ジョンソン老人宅で朝食を供された。東西社に山内を訪ねた。小野瀬もやってきた。二十六日、腸のぐあいが悪いため終日家にいた。湯川、山内、市橋らがやってきた。中沢をともない片山 潜（潜）（一八五九—一九三三、明治から昭和期の社会運動家。国際共産主義運動指導者。渡米後、血洗いをし大学を出る。のちモスクワで死去）がひっこり部屋にやってきた。そのときの驚きとよろこびは言葉でいいつくせなかった。

二十九日、夜、片山 潜（潜）がやってきた。マーケット通り（マーケット通り）（サンフランシスコの本町通り）の一レストランで会食した。翌三十日の午後、片山をフェリーの埠頭に見送った。このとき大西勝三、町田忠秀らに会った。

明治三十九年（一九〇六）一月一日。

朝、フリッツ女史宅を訪れた。Widen (スウェーデン人) といっしょに、サクラメントからやって来た Dr. Pyburn (七十五、六歳、無政府主義者) を訪問した。それよりジョンソン老人宅をおとずれた。サンドフォード夫妻、フリッツ母子などがおり、写真をとった。

午後、平民社におもむいた。岡夫妻、山内夫妻、加藤らがあり、記念の写真をとった。夜、山内はメキシコに行くことになり、同人を見送った。妻の八重子はフリッツ宅に寄寓することになった。幸徳の腸のぐあいは全快というほどでなかったが、平民社で正月を祝うとき、雑煮・しる粉・かずの子などを食べた。

三日、河瀬如洞、高木、中沢らがやって来た。いっしょに中華料理をたべた。四日、米田切水がやってきて、『日米』新聞のために寄稿をもとめられた。

六日(土)——夜、オークランド市の同志が、幸徳を招いて演説会をひらいた。会場は、カリフォルニア州全体の白人の社会党本部の会堂(ホール) (「セントマークス・ホテル」内——八番街四〇九番地——St. Mark's Hotel, 409-8th Street) を借りたものである。そこはサンフランシスコと同じような設備があり、正面の演壇のうえには、マルクス、ラサール、リーブクネヒトなどの大きな肖像画がかけてあった。

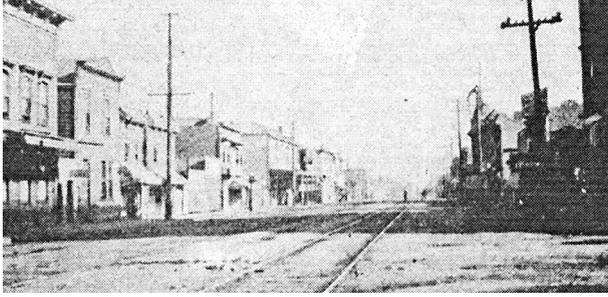
この日の会は、午後八時からじまった。聴衆は二〇〇名ばかり。司会は植木がとめ、まず週間新聞『ザ・ソシャリスト・ヴォイス』紙の記者マクデーヴィッドが登壇し、三十分ほど熱弁をふるった。話の骨子は、万国の労働者が結束する必要を説き、さらに日本の同志への囑望とその奮起をうながしたものであった。つぎに幸徳が壇上にあがり、一時間ほど社会主義の要点について語り、さいごに「社会主義の歌」をうたって閉会した。

オークランドの学僕の中には、新知識のある者が多く、社会主義の思想が思いのほか広まっている印象をもった。だから将来、かれらとサンフランシスコの同志が連合すれば、大きな勢力になるとおもった。

七日(日)、夜、平民社で小さなあつまりがあった。十三日の夜、幸徳は日本人福音会の一室において講演をおこない、また社会主義思想研究の討論研究会をひらいた。翌十四日の夜、同会において社会主義研究会をひらいた。

一月二十一日——ペテルスブルクで第一次ロシア革命の端緒となる「血の日曜日事件」が起ったのが、この日(一九〇五・一・二二(明治三八) 露曆一・九)である。が、その鮮血の日曜日を記念する会がアメリカの各州、各都市において、盛大に挙行せられた。

同夜、オークランドの「メールホール」(正しくは「メイプル・ホール」Maple Hall)。その位置は十四番街とウェブスター街が交差するところ。



オークランドの日本人町
『北米踏青写真帖』より。

現存しない)で記念祭がおこなわれ、日本人の社会党員三、四十名が出席した。アラメダ、パークレーといった近郊から散集した者は、男女四〇〇余名であった。

会場は電灯がこうこうと輝き、記念祭はマルセイイエーズ(フランス国歌)をもってはじまった。あらかじめ指名されていた演説者は、それぞれ二十分ほどじぶんの意見をのべた。

アンソニー……世界工業労働者組合の代表。従来の資本労働、調和主義の組合を排して、革命的の急要を主張した。

オリーブ・ジョンソン夫人……マルクスらが組織したインターナショナル協会の性質から話をはじめ、労働者革命の万国的なるを宣言した。

オースチン・ルイス(「社会党」)……ロシア政府の暴挙ぶりを手ひどくののしった。

さいごに幸徳が、日本の同志を代表して演説をおこなった。かれはロシアの同胞の革命は、世界的革命の先頭をいくものであり、われわれは全力を尽くしてこれを助けるべきである旨を語った。

四人の演説中、たえず拍手かっさいがおこり、幸徳の演説がおわったとき、十数名の者がすぐ演壇にかけあがってきてかれの握手をもとめた。かれらの多くは、ロシアからアメリカにやってきた流浪の民であった。その夜あつまった、ロシアへ送るための寄付金は、五八ドルであった。

なお、「血の日曜日」の記念祭がおこなわれる予告は、『オークランド・トリビューン』Oakland Tribune 紙(一九〇六・一・二〇付)にのっており、それは左記のような記事であるが、この中に幸徳の名前がみられる。

革命のために

ロシア革命のための国際的祝典が、一月二十一日(日)「メイプル・ホール」(十四番街とウェブスター街)において午後八時から挙行される。すばらしい音楽番組が予定されている。つぎの名士が演説をおこなう。

社会党のオースチン・ルイス 世界工業労働者組合の J・B・アンソニー

社会主義労働党のオリーブ・M・ジョンソン 日本の『直言』の編集発行人 D・幸徳



19世紀の「クリフハウス」と「あざらしの岩」。幸徳らの遊樂地。
Public Library in SF 蔵。

大勢の聴衆が参加するよう。

翌二十二日の夜、こんどはサンフランシスコの「リリック・ホール」(Lyric Hall)——ラーキン街とトルコ街が交差するところ——で、おなじ会合が催されたが、来会者はオークランドの三倍もの多数に達し、二四〇ドルの義捐金をえた。

一月二十六日——この日は暖気があり、東京の四月末の陽気であった。すこし歩くと、汗ばむほどであった。午後、

幸徳秋水 川崎巳之太郎 (日本総領事館の密偵)

岡夫人 (敏子) 大西勝三

山内夫妻

野村勇子嬢

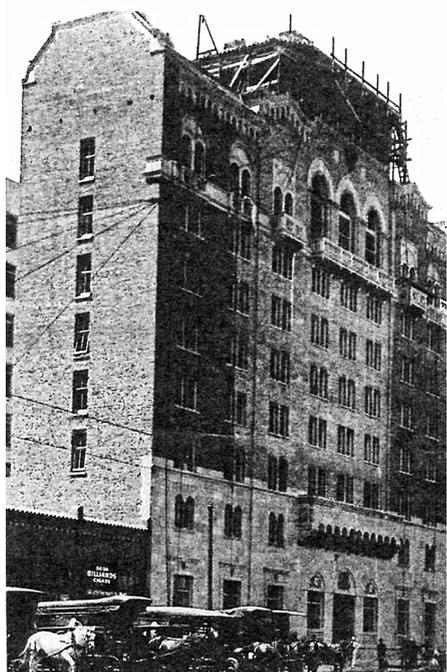
加藤時也

ら七名は、太平洋の浜に遊びに出かけ、クリフハウス Cliff House (崖の家)——外洋蒸気船のフォスター船長が一八六三年に建てたもの⁽²⁶⁾でゆったりとくつろいだ。アイスクリームをたべ、飲ものでのどをうるおした。皆の視線は、感慨ぶかげに水平線のかなたに注がれ、故国のことをおもいだした。

二月五日、朝、加藤時也はサリナス (サンフランシスコの南東約一五〇キロ、農作物の集散地) におもむいた。

十一日、福音会において社会主義研究会が開かれた。幸徳は十五日よりカゼをひき、四日ほどふせていた。

十九日、午後、社会労働党本部にいった。二十二日、ジョンソン夫人宅を訪れた。オークランドから竹内、丸岡らがやってきた。二十三日、朝食をジョンソン夫人宅でとった。



YMCAの建物（サンフランシスコ）

Public Library in SF 蔵。

三月三日、幸徳のおい幸衛が、二月二十七日汽船でシアトルを出立し、この日の朝サンフランシスコに到着した。二、三日平民社ですごしたのち、学僕になるつもりであった。幸徳はYMCA（エリスとメーソン街の北東の角）で開かれた飢きん救済会で演説をした。五日から英会話の教師のもとに通うことにした。九日、仏教青年会において社会主義演説会がひらかれたが、幸徳は病のために欠席した。十六日、夜、ジョンソン老人と Malevsky 氏（フィルバート街）をたずねた。

二十二日、ジョンソン老人にともなわれて図書館（いまの Public Library か）にいき、借り出しのしつこくをした。宗教上のシンボルについて知るためである。先日、Liberal Review 誌にのっていた Karkin 教授の論文に——十字架は生殖器崇拜のシンボルの名残りである、といった記事に興味をおぼえ、研究の念が起ったからである。

四月一日（日）、小川亀次郎、加藤時也らとパークレーに遊んだ。延岡常太郎やおいを訪ねた。この日、平民社で婦人の講演があり、幸徳はその会に出席した。

四月十八日——朝の四時半ごろサンフランシスコ付近で、マグニチュード七・八の大地震がおこった。ついで下町（市の中心部）の火災が二十余ヶ所からおこり、延焼をふせぐためにダイナマイトをもって家屋を爆破した。が、市は三昼夜もえつづけ、市街の大半は焼けてしまった。火は平民社のちかくまで迫ったので、そこで暮らす同志らは空地に避難した。フリッツ一家も空地に災難をさけた。焼け出された市民は約三〇万人

日本人罹災者は一万人という。⁽²⁷⁾

十九日、火はおさまらず、下町から南北にひろまる気配があった。幸徳は、ウィルバー、バイヤー、フリッツ婦人らとマーケット街の焼跡を見に出かけた。爆発の心配があったので、役所から布達が出され、各戸の点灯、火を使うことを禁じられた。フリッツ夫人の娘は、サクラメント（サンフランシスコの北東約一五〇キロ）に行った。避難のためか。

さいわい平民社やフリッツ夫人の建物は焼けのこった。そのため平民社では、十数名の被災者が起臥するようになり、またフリッツ

夫人の家には、焼けだされた五、六名のロシア人やドイツ人の革命党同志らがやってきた。

二十日も火災はおさまらなかつた。二十五日、竹内鉄五郎にもなわれ、オークランドにおもむき一泊した。当地はサンフランシスコから避難してきた人々で雑踏していた。社会主義者の本部がおかれている「メイプル・ホール」に二〇〇名以上の避難民が収容されたが、大半は毛布もなく床のうえで寝ざるをえなかつた（『Oakland Tribune 紙』一九〇六・四・二四付）。二十六日、湖畔（Lake Merritt のこと）を散歩したりして半日をすごし、丸岡、竹内らといっしょにサンフランシスコに帰った。二十七日、午後、カストロ（サンフランシスコ郊外）の鷺津をたずねた。

五月二日——サンフランシスコを引き払い、オークランドに移った。当地の南^な美^み江^え教会の三階は同志のクラブ（本部）になっており、そこで暮らす竹内の部屋に泊ることになった。長谷川、倉持らがやってきた。

十五日、ジョンソン老人とともに、アラメダ（サンフランシスコ湾の東岸——オークランドの西約八キロ）に住む元裁判官 Ladd 翁（^{おきな}翁は、七十五、六）をたずねた。当人は健康がおとろえていたが、大いに歓迎してくれた（かれは無神論者であった）。二時間ほどすごし辞去した。ジョンソン老人を停車場まで見送った。

十九日、仏教青年会において、社会主義研究会をひらいた。

三十一日、午後、ジョンソン老人が南^な美^み江^え教会にやってきた。幸徳が同教会の三階にある同志のクラブに寝泊まりしていたからである。晩さんとともにし、幸徳は漢詩をかれに贈った。

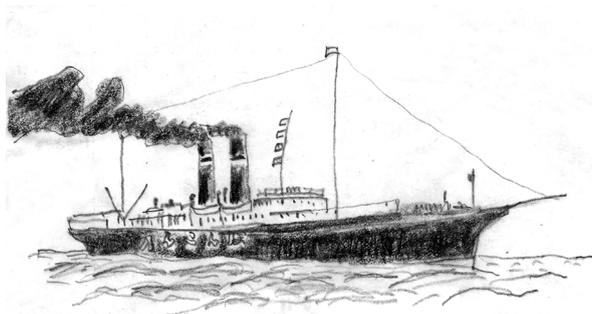
六月一日、白人の社会党本部（テレグラフ街）で催された結婚式に出席した。この日、幸徳は近々帰国するため、「社会革命党」を結成した。黨員は五十余名。

二日、帰国の準備のためサンフランシスコの平民社に移った。小川金治は、幸徳を見送るためにベネシアからやってきた。ジョンソン老人は、送別の長詩をかいて贈ってくれた。

三日（日）、午後、オークランドの白人の社会党本部にいき書物を求めた。夜、南^な美^み江^え教会内の同志のクラブにおいて、小宴が催された。

四日、幸徳を見送るため、河瀬如洞がサンマテオからやってきた。夜、日米の記者らが送別のための晩さん会をひらいてくれた。

六月五日、幸徳は、岡 繁樹とともに香港丸にのり、サンフランシスコを発し、一路故国をめざした。



幸徳らが帰国するとき乗った“香港丸”(6000t.)の図。

幸徳のアメリカ観。

幸徳は、明治三十八年（一九〇五）十一月十四日——同志らの“赤旗”の見送りをうけ、伊予丸でアメリカを目ざして、横浜を出帆し、約半年後の翌明治三十九年（一九〇九）六月二十三日の朝、横浜に帰着した。アメリカ訪問といっても、かれが滞在したのはカリフォルニア州のシアトル——オークランド——サンフランシスコの三ヵ所にすぎず、その見聞の範囲は、かぎられたものであった。

が、現地においてじっさい見たり聞いたりしたもの、また印刷物からえた知識は、かれのアメリカ観を形づくるのにすくなくならず役立ったはずである。いまからかれが直接体験によつてえた感懐（感想）を項目べつにのべてみよう。

在米同胞のようす。

故国（日本）の一般国民からすれば、アメリカは自由でゆたかな国だとする見方がつよい。アメリカは苦のない、たのしい生活が送れる楽土なのである。しかし、幸徳はさめた気持で、アメリカ（カリフォルニア）にいる日本人をみつめている。かれらが当地において、幸福な生活を送っているかという点になると、大いに疑問だといふ。

ひとの幸福は、一概にいえないからである。その境遇——知識——趣味（たのしみとして愛好するもの）などにより異なるからである。

本国の日本人は、うえ死や凍死する懸念があつても、みな仲よく、やわらぎ、たのしみことができる家庭というものをもっている。が、在米日本人で家庭をもっている者は、じつにすくない。大部分は、漂泊の民なのである。一日の労働をおえて、ねぐらに帰つても、一つの愛らしい微笑がかれを迎えることはない。家庭は、幸福の源泉であり、貧乏もこれによつていやされる。

安住せず漂泊の生活は、責任の念うすく、放らつに陥りやすい。かれらにとつて同情の社会はなく、ましてやかれらは、かたい信仰やふかい知識をもたず、高尚なる品格なく、衣食に不自由がないにしても、落莫（らくぼく）たる（さみしい）人生を送っている。かれらは砂漠をゆく隊商のようなものである。その仕事から解放されたときのたのしみは、酒とバクチと娼婦だけである。

在米の同胞は、金銭をえて、生活の安定をのぞむのであれば、隊商の生活を送らざるをえない。その生活

に困苦し、つかれ、のたれ死にするしかない。

毎週日曜日の夜——サンフランシスコの平民社では、談話会が催されたようであるが、そこでいつも議題になったのは、

価格（物価）問題

倫理問題

恋愛問題

宗教問題

などであった。幸徳は、アメリカにくるまで、日本人の同志はクリスチアンかと思っていたら、その予想はずれた。

大多数は、マルクス派であった。すなわち、歴史的唯物論から出発した科学的社会主義者であった。福音会の教会で起臥する者ですら、マルクスの考えをもち、汎神論者（神と世界は一つとする哲学観をもつ人）であった。

幸徳のアメリカ観の変貌。

渡米するまで幸徳は、アメリカという国は民主政治の国——言論・集会・出版の自由がある国とみていた。が、政治・風俗・習慣にはげしく反抗する者は、乱暴なる迫害をうけていることを知った。たとえば明治三十九年（一九〇六）五月中旬——サンフランシスコで催された労働者の運動会において、多くの同志が警官に殴打おうちされたり、獄に投じられたりした。その運動会は、コロラドにおいて西部坑夫同盟の役員が投獄された事件にたいする抗議として開いたものであった。

また白人の社会党員が、大きな通りで演説でもしようものなら、警官からさまざまの妨害をうけたり、無神論（神の存在を否定する立場）や無政府主義的な出版は、いつも束縛をうけていることである。アメリカは富豪や宗教家にとって、まことに自由な国であるが、労働者にとっては、ロシアや日本とおなじ、圧制や迫害をうける国であった。

資本家や地主階級があるところに、自由や人権は存在するのか。それらがある所にいるのは、暴徒だけである。

アメリカへの日本移民。

日本人が故郷をすて、アメリカにやって来るのは何のためか。それは故国が人を保護し、その生活を保障しないからである。土地はつねに地主に領され、中小企業はつねに大資本家に圧倒され、小作人と賃金労働者だけがふえる一方、貧富の格差だけが大きくなっている。地方の田野はますます疲へいし、都会へ人口が移動している。これが異郷に生活の手段をもとめる理由である。

アメリカは衣食をえるのが容易であり、生活しやすいという理由による。が、そのためには、皿洗い・窓ふき・下男・鉱夫・農夫など、辛苦をいとわず、あらゆる仕事につく必要がある。幸徳は職業に貴賤はないといていたが、内心厳然たる事実として、それが存在することを認めざるをえなかった。

幸徳にとって国家のしごととは、国民の保護につとめ、安心してくらせる社会をつくることであった。

アメリカで暮らす日本移民が必要とするものは、深い同情である。日本人社会といえど、そこはじっさい人間らしい思いやりには欠いた非情な世界であり、あわれみや同情がなかったという。あるのは競争、しつと、排せきの情だけであり、たよれるのは我が身ひとつである。

日米関係の将来。

幸徳は百数十年まえ、すでに日米が戦端をひらくことを予見している。太平洋上に境を接する日本とアメリカが、商工業が発展するにつれて、その販路をめぐって衝突することは必至とみた。世界貿易の中心は、地中海でなければ、大西洋でもなく、太平洋の沿岸、東洋各地——日本・朝鮮・中国・フィリピンなどである。

アメリカは財貨（金と品物）が多量にあつまり、資本の夥多（おびただしさ）、生産の過じょうに苦しんでいる。その資本をどこに投じ、どんな新事業をはじめべきか、また商品のはけ口をどこに求めるべきか悩んでいる。もしアメリカが、東洋における経済的侵略をやめたばあ何が起こるのか。

品物は滞積し、工場は閉ざされ、労働者は解雇され、たちまち恐慌がおこる。国際間の争いは、商工業の利害の衝突に起因し、平和をたもち戦争の惨禍をさけるには、各国が経済的競争をやめるしかない。

社会主義は、いまのように競争を主としている経済組織に反対のたちばをとり、一国共同（資本家と労働者の協同）の生活——世界共同の生活を営もうとするものである。社会主義者の眼中にあるものは、国境の別なく——人種の別なく——あるのは四海同胞（四海兄弟）の主義だけであ

る。

将来の戦争を防止するものは、社会主義だけである。社会主義は、じつに平和の天使なのである。

注・『日米』明治39・1・21、署名不詳、『平民主義』所収。

アメリカにおける幸徳の遺産。

それはなんといっても帰国をまえに、かれがオークランドにおいて

倉持善三郎

岩佐作太郎

竹内鉄五郎

岡 繁樹

らと、六月一日（日）の夜——「社会革命党」なるものを結成したことである。そのことについて、幸徳の渡米日記に、つぎのような文章が一行しるされている。

六月一日

夜テレグラフ街 白人社会党本部に開ける結党式のそに臨む。

この文章は、多少注釈を要する。会場は白人の社会党本部 (Socialist Headquarters) が置かれている「メイプル・ホール」Maple Hallとも「ガリンド・ホテル」Galindo Hotel (一九〇五年) と呼ばれている所である。このガリンド・ホテルはのちに「セント・マークス・ホテル」St. Marks Hotel に名称が変わった (一九五五年)。その位置は、いろいろ表記されている。



幸徳らの「社会革命党」の結成式がおこなわれた、白人の社会党本部（テレグラフ大通り，オークランド）。建物は存在しない。

Public Library in Oakland 蔵。

一九〇六年六月一日の夜——在米の同志五十余名は、オークランドにあつまり、「社会革命党」なるものを組織した。その宣言——綱領——党則の概要の意識は、左記のようなものである。

〔社会革命党 宣言〕

八番街四〇五番地……『オークランド・トリビューン』紙（一九〇六・四・二四）
(405, 8th Street)

テレグラフ大通り（別名ウェブスター街一四〇八番地）

(Telegraph Ave, 1408 Webster Street)

われわれは満天下（全世界）にむかって、社会革命党の結党を宣言する。数多の民衆がつねに貧困や飢餓に泣いておるときに、労働なるものは本当に神聖なるものなのか。一個人（天皇）の私利私欲をみたさんがために、数多の民衆が自由や権利をうばわれているときに、はたして人生はどんな価値があるのか。いまの不正な社会を改革し、善美なる自由、幸福、平和なる社会を建設することは、祖先や同胞や子孫にたいするわれわれの責任である。

われわれは、別に定めた綱領にしたがい、社会的大革命の実行にしたがうものである。

〔綱領〕

われわれはいまの経済的、産業的競争制度を全廃し、いっさいの土地や資本を万民の共有となし、貧困者をなくすことを期す。わが党は、いまの迷信的階級制度を改革し、万民に平等の自由と権利とを保有せしめんことを期す。わが党は以上の目的を達成せんがため、世界各国の同志と連合協力して社会的大革命をおこなう必要をみとめる。

〔党則〕

第一条 わが党は社会革命党と称す。

第二条 わが党は本部を合衆国カリフォルニア州バークレー市に、支部を世界各国におく。

第三条 わが党の趣旨、目的に賛同するものは、男女、国籍、人種を問わず、加入することができる。

わが党の費用は、黨員および同情者の寄付金をもって支弁する。

(あと二条あるが省略する)

注・八ページの小新聞『革命』(The Revolution, Berkeley, Cal. December 20, 1906)の冒頭にのこったもの。

幸徳は社会革命党の結成をおえたのち、明治三十九年(一九〇六)六月五日——折から日本に印刷機を仕入れにかえる岡 繁樹と、サンフランシスコより香港丸に乗船し、帰国の途についた。同月二十三日の朝、横浜に帰着し同志らにむかえられ、午後四時新橋に到着。

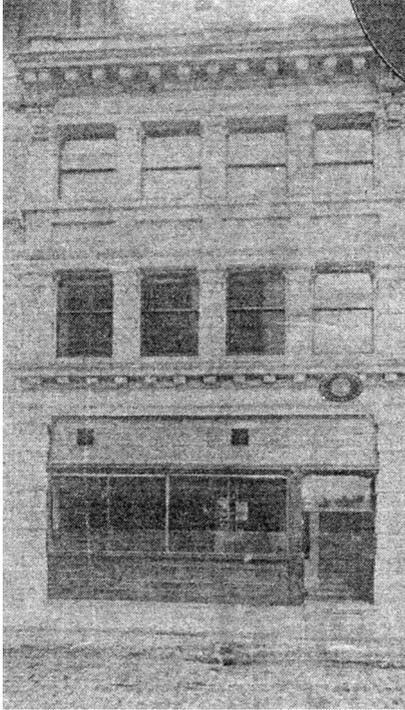
二十七日、メトロホールにおける歓迎会に出席し、翌二十八日神田錦町の貸席「錦輝館」において開かれた日本社会党(日本発の合法的無産政党)主催の演説会において、「世界革命運動の潮流」と題して演説した。それはかれの帰国後の第一声であった。このなかでは従来の運動方針に疑問を投じた。⁽²⁸⁾

国内では幸徳がアメリカにいる間に、桂内閣から西園寺内閣にかわり、新内閣は社会主義を国家の進運に役立てようと、その思想の取りしまりに新機軸を出そうとした。幸徳の演説の骨子は、つぎのようなものであった。

——わたしは相変わらず、むかしのまゝの社会主義者である。しかし、主義、理想とするものは変らないが、それを実現するための方法手段は変わった。かれは欧米における、ことにドイツ社会党の例をひいて、議会政策を無価値とし、無政府主義による直接行動(ゼネスト)が将来の革命手段として最良の武器になることを紹介した。⁽²⁹⁾

同日、かれは支援者・加藤時次郎の病院に転居し、七月四日妻とともに新橋より帰省の途についた。

日本社会党(堺 利彦、片山 潜ら二〇〇余名の黨員をようする)は、明治四十年(一九〇七)足尾鉾山の争議を支援すると、わずか一年で禁止され、太平洋戦争終結後に再設された。明治四十一年(一九〇八)六月二十二日——錦輝館の二階で山口義三(一八八二〜一九二〇)、明治期の社会主義者、孤剣は(ペンネーム)の出獄歓迎会をひらいたが、このとき大杉 栄らが「無政府共産」と大書きした「赤旗」を押したたてたために警官隊と衝突し、大杉・堺ら十三名が逮捕された(「赤旗事件」)。



サンフランシスコの日本総領事館の建物。
『北米踏青写真帖』（吉川弘文館，明治44・3）より。

同年七月、これを機に西園寺内閣は総辞職し、桂内閣にかわり、以後弾圧が強化された。一方、帰国後の幸徳は、在米日本人社会主義者と気脈を通じ、社会革命党の機関紙『革命』（三号で廃刊）の第二号に、「革命！」を執筆した。幸徳が帰国して約一年半後の明治四十年（一九〇七）十一月三日——サンフランシスコ、バークレー、オークランドの日本人社会で肝をつぶすような事件が突如おこった。

一 明治天皇への公開状

—— 日本天皇睦仁君に与ふ

この日、各地の在留邦人が「天長節」（天皇誕生日）の奉祝会をひらこうとしたとき、サンフランシスコの日本総領事館（オフアレル街一二七四番地）をはじめ、バークレーやオークランドの日本人居住区の建物——学校、銀行、集会所などに、檄文（大衆につける文書）がベタベタと張られていることに気づいた。それは単なるビラとことなり、不敬事件であった。

「我徒ハ暗殺主義ノ実行ヲ主張ス」という文章にはじまり、ついで

暗殺主義 第一巻 第一号

An open letter to Mutsuhito Emperor of Japan from Anarchists
Terrorists

といった文がみられた。これにつづく文章は、天皇にたいして敬意を欠いたものであり、

日本皇帝睦仁君ニ与フ

日本皇帝睦仁君足下（足下は、貴人または対等のひとに対する

敬称。あなたの意) 余等無政府党 革命党暗殺主義者ハ 今足下二一言セント欲ス

とあった。この檄文は、明治天皇（一八五二〜一九一二、孝明天皇の皇子）への公開状のかたちをとっていた。

中味は同志を迫害する天皇の悪逆無道ぶりを糾弾し、他日の報復を約したものであり、さいごの文章は、

足下ノ命ハ 旦夕ニ迫マレリ（切迫している） 爆裂彈ハ 足下ノ周圍ニアリテ 將ニ破裂セントシツ、アリ サラバ足下ヨ……

とあった。謄写 (mimeograph) 版で刷ったこの印刷物（二頁くらいのも）は、日本総領事館の玄関のドアもしくは、その下に差し込んであった。

「日本皇帝睦仁君ニ与フ」といったこの公開状の存在は、伝聞として広く知られていたらしいが、その原文は外務省で何部かつくり、その一部が狩野亨吉の所有に帰し、その文庫が東北大学図書館におさめられた。その秘密文書は、東北大学の中村吉治教授や図書館職員の好意で『明治文化全集』の社会篇に「米国ニ於ケル 日本革明党ノ状況」と題して、関連記事といっしょに収録されたのは、昭和四十三年（一九六八）一月のことか。

檄文の概要をかいつまんでしるすと、つぎのようになる。原文は漢字とカタカナの混交文であるが、それを意識し、摘記したものが、左記の文章である。

天地間に存在するあらゆる物体は、一分一秒も静止することはない。人類界もおなじである。はるかにさかのぼって人類の祖先をたずねてみると、それは猿類であることがわかる。足下は知っておるか。足下の先祖という神武天皇は何者なるかを。日本の史学者は、かれは神の子であるというが、それは足下におべっかいを呈したものであり、作り話である。

かれもまた猿類から進化した者であり、なんら特別の機能をもつものではない。かれはどこで生れた者かについて、こんにちあしたかな論拠はないが、土人（土着の人種）でなければ、中国かマレー半島あたりより漂流してきたものであろう。かれは付近を略奪し、多くの奴れいをつくり、大いに暴威をふるったが、それは足下がこんにちわれわれにむかってやっていることと異ならない。

当時、もっとも残酷で非情であった神武天皇は、主権者や統治者の名目のもとに、あらゆる罪悪汚行をおこない、その子もまた父にならい、それをおこない、ついに百二十二代の足下にいたった。

ああ、二千五百有余年のあいだ、足下の祖先および足下らは、その権力を維持し、虚栄心をみたすために、いかにわれわれを苦しめたことか。いかにわれわれの多くを殺し、富をうばったことか。

吾人ハ之ヲ思フ時ニ当リ 足下等ノ首ヲ切り足下等ノ肉ヲ炙リテ喰フモ 猶アキタラサル心地ス（われわれは、このことを思うと、貴殿らのくびを切りおとし、貴殿らの肉を焼いて食ってもあきたらない）

あえて問うが、足下らは権力をどこからえたのか。もし生れながらにして得たものとすれば、迫害と蹂りんをうけてきたわれわれにもそれがあるはずである。

こんにち足下は、その権力を絶大無限のものとするために、機関として政府をつくり、法律を発し、軍隊や警察を組織した。一方、従順なる人民をつくるため、奴隷い教育、すなわち忠君愛国主義を土台とする教育につとめている。その必然的結果として生れたものは、貴族——資本家——官吏である。これらの連中は、足下（天皇）の威をかりて、暴虐無道をおこない、あたかも人民を木偶（木ぼりの人形）でくのぼう）のように扱いかい、日本人民はけっして自由をあたえられないことのない、奴隷いとなりさがあった。

足下は神聖にして侵すべからざる者となり、紳士閥は泰平をならべているあいだに（のんきに構えているとき）、人民はますます苦境におちいついていく。

睦仁君下、「人」のひとたるゆえんは、自由があつてこそということを知るべきである。ああ、人として生まれて、人らしく生きることを望まない者はいない。われわれは人間らしい生き方を望むものである。だから奴隷いの位置をすて、自由の位置をうる必要がある。

自由なくして何の人生だろうか。人は自由に生き、自由であつてこそ、はじめて進歩発展するものである。ところが足下の権力とその機関は、つねにその生を害し、その進歩発展をさまたげているではないか。

足下および足下の機関は、われわれ五千万人の日本人を人間として扱っていないのに、足下に敬意を表し、陛下とよばねばならぬのか。睦仁君足下、足下はさきに暴威の範囲を拡張せんがために隣邦の中国と戦い、ちかくはロシアと戦った。このとき足下のたいこもちは、挙国一致を説き、忠君愛国を

かたりつつ、殺りくを奨励した。ああ、中国とロシアの国民は、わが国の平民にいかなる恨みがあるというのか。われわれはお互いよく知らぬゆえに、利害損得がないはずなのに、足下の奴隷的教育に養われた者は、国家のためとさげび、足下の法律の強制により戦場に走った。

かれらの多くは、何のために戦ったのかよくわかっていない。が、戦争の結果、われわれに何をもたらしたかを語っている。戦後、足下は一等国の君子となったではないか。貴族は爵位をもらったではないか。だが、じっさい銃を手にし、戦った平民の子は、戦場の露とさえ、あるいは傷つき、あるいは捕虜となり、さいわい帰った者は、重税をかせられ、十億の国債を荷って、飢がと戦っているではないか。

人は生(いきる)ことを欲する。このことは足下も、われわれも同じである。すべての動物は、生の自由をもっている。われわれの生存(生きて生命を維持する)は、幸福のためである。が、足下に束縛され、生存しているわけではない。足下の権力は、つねにこの生存の自由を無視している。

足下は謀殺者(計画的な人殺し)であり、逆殺者である。そのような者にたいして、われわれは忠実な奉仕をなす義務があるだろうか。

足下はただその権力を維持するために、かくまでも多くの犠牲をつくった。日本の自由論者が、足下になにを語り、なにを要求しつつあるかに耳をかたむけたことがあるか。足下はそれに耳をふさぎ、かれらを迫害し、圧制しつつあるを、余らは知っている。自由をさげんだ新聞雑誌は、発行を禁じられ、罰金を課せられたではないか。

記者は入獄を命ぜられたではないか。自由を要求した労働者の一群は、軍隊に射殺され、投獄されたではないか。単に憲法の範囲内における自由を主張した日本社会党すら、解散を命ぜられたではないか。ここにおいてわれわれは断言する。

足下は、われわれの敵であると、自由の敵である、と。

われわれはいたずらに暴(ぼう)力(りき)を好むものではない。が、暴をもっておさえつけられたとき、暴をもって反抗せねばならぬ。われわれはさいごの血滴をそそぐことはないにせよ、足下に反抗し、現在の秩序に反抗せねばならぬ。

遊説とか煽動といった手ぬるい手段をとらず、暗殺を実行し、スパイ、圧制者はことごとく、その地位をとわず、謀殺せねばならぬ。

足下の政府はいつとき意のまま、われわれを絞殺し、一部の革命団体を圧伏(あつか)し(おさえつけ)、打破できても、事物のありさまを変更することはできない。

革命というものは、起さんとして起るものでなく、自然に起るものである。革命はけっして個人に関係することなく、むしろ社会有機体の進行である。国民の不満から生じるのではなく、自然淘汰の作用によって生じるものである。その作用のさいごに起るものは、われわれの暗殺主義そのものである。

これを単なる紙上の空論と誤認してはならぬ。暗殺主義は、いまやロシアにおいて最も成功し、フランスにおいても成功しつつある。われわれの暗殺主義は、これらの先進者の成敗（成功と失敗）に照らし、くわしく研究したのち生れたものである。

あわれなる睦仁足下 足下の命は旦夕にせまっている。爆裂弾は、足下のまわりにおいて、破裂寸前である。さらば足下よ

（明治40）
一九〇七年十一月三日

無政府党暗殺主義者

この公開状の要点を抜きがきすると、つぎのようになる。旧憲法において、天皇は神聖にして侵すべからず存在であった。が、その素性を暴露し、天皇制絶対主義の本質をあはこうとしたのが、この文書である。

- 一 天皇はわれわれ庶民とおなじように猿類の子孫である。
- 一 忠君愛国教育のもと、国民は日清、日露の戦争に駆りたてられたが、いちばん泣きをみたのは平民である。
- 一 一人には生きる自由がある。自由のない所に幸福はない。天皇の諸機関は、国民を人間あつかいせず、その自由権に目をふさぎ、国体をおびやかす者を弾圧している。日本人は自由をもたぬドレイとおなじである。自由なくして、なんの人生か。
- 一 謀殺者、逆殺者である天皇に奉仕する義務はない。
- 一 言論弾圧の元凶は、天皇であり、かれは自由の敵である。
- 一 われわれは、暴をもって暴にむくいねばならぬ。
- 一 スパイや圧制者を、誅伐する必要がある。
- 一 革命は自然の成りゆきである。暗殺主義によってなされる。
- 一 天皇の命は、風前のともしびである。

要するに、この公開状は、天皇を殺りく者——自由の敵——国民の敵ときめつけたもので、その糾弾内容にいたっては、空前絶後のものであつ



不敬事件の中心人物とみられる竹内鉄五郎。

雄が、密偵（川崎巳之太郎、巽鉄男）を使った。

を使い、調査させたところ、その起草ならびに謀議にかかわったと考えられる者の氏名がほぼ明らかにな

た。

この公開状は、アメリカより日本にいる旧平民新聞の関係者らに秘かに送られ、国内にバラまかれたものらしい。サンフランシスコの日本総領事館の事務代理・松原（明治35・4）、同校を卒業した（明治36・4）。渡米したのは、東北学院長だったアメリカ人の周施によるものらしい。

明治三十七年（一九〇四）ごろ渡米し、パークレーでコックとなった。が、意のごとくならざることが多く、やがて社会主義者と交際するようになり、無政府主義をとえ、極端に走ったようである。

「本人ハ米國桑港無政府黨 暗殺主義ノ主謀者タル如ク 其ノ主張ヲ記載セル印刷物発行者ノ一人ト目セラレタルモノニシテ……」
と報告されている。

身体的特徴は、身長五尺三寸、中肉（ふとりすぎず、やせすぎず）、丸顔である。色は白いほう。まゆげうすく、目はするどい方。鼻はたかい。
年齢は、二十四、五歳。パークレーのヒレガス街二五七一番地に居住。「音声たかく能弁ナリ」という。

のち当人は、フレズノ市（カリフォルニア州中南部の市、サンフランシスコの南東二六〇キロ）で労働組合を組織し、労働賃金闘争をおこない、明治四十二年（一九〇九）十月と十二月、幸徳の窮乏を援助するため、計三百円の寄附金を日本へ送った。

小成田恒郎（生没年不詳）……

岩手県江刺郡米里村のひと。尋常高等小学校をおえたのち（明治26・3）、仙台の東北学院、正則学校などに学んだ。東京の福音教会に出入りし、片山 潜の周施により渡米し、パークレーの白人方のコックとなった。夜、植木治太郎が営む下宿屋（赤いペンキをぬった主義者の本部）に出入りした。

「事物ニ感激シ易ク 且ツ過激ナリ」と報告されている。文筆や算術に長じ、街頭演説をおこなった。

年齢は、二十五、六歳。

岩佐作太郎（一八八〇〜？）……

千葉県長生郡茂原町のひと。祖父はむかしの名主であり、変人であった。村民と田畑を共同耕作し、山は村民の共有とした。作太郎は、この祖父の感化をうけて少年時代をすごした。

教唆者（そそのかした人物）または共同謀議者とみられる者

東京法学院（現・中央大学）か明治法律学校（現・明治大学）を卒業後、高文試験をうけたが不合格となった。明治三十五、六年（一九〇二、一九〇三）ごろ、法律をまなぶために、渡米し、サンフランシスコの福音教会に身をよせていた。が、やがて社会主義にそまり、大地震のち、パークレーに移り白人方にコックとして雇われた。年齢二十五、六歳。

大正初期に帰国し、雑誌『労働運動』『小作人』『社会主義』などの創刊執筆にしたがい、昭和初期以後、郷里の千葉にひきこもり、表面に出なくなった。

倉持善三郎（一八八四〜？）……

茨城県猿島郡沓掛村のひと。沓掛尋常高等小学校を卒業後（明治30・3）、本郷区の湯島学而館中学に進み、さらに済生学舎で、物理・化学・生理学などをまなんだ。のち本郷区豊坂の坂本郷英学院に入学したが退学。猿島郡立農学校に入学し、同校を卒業（明治37・3）。

畜産学をまなぶつもりで渡米し、やがて社会主義者としたしむうちに黨員となった。

「温和をよそおっているが、狡かつ、奸智に長じている」と報告されている。性格は「短慮ニシテ 時事ニ憤激シヤスシ」とある。年齢は二十六、七歳。サンフランシスコで日雇い（雑誌発行の助手）をやっていた。

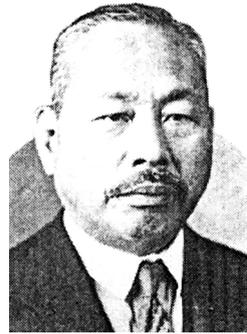
注・以上四名の略歴その他は、「米國ニ於ケル」

日本革命党ノ状況』（『明治文化全集 第22巻 社会篇（上巻）』所収を利用したほか、「過激派其他危険主義者取締関係雜件 本邦人之部（別冊）主義名簿ノ一」（外交史料館蔵）を参照した。

これら四名のうち、竹内と小成田は、東北学院の同窓生である。



岩佐作太郎



晩年の川崎巳之太郎

起草者（草案を書きおこした当人）は、竹内鉄五郎であったようだ。それに小成田・岩佐・倉持らが印刷物の準備と頒布に手をかしたのが真相のようである。小成田は、ひじょうに文才があったというから、起草に一枚かんでいたかも知れない。印刷所はどこだったのか、わからずにおわった。

サンフランシスコの日本総領事館の事務代理・領事官補・松原一雄（二八七七〜？、福井吉田郡のひと。東京帝大法科大学卒業後、文官高等試験に合格。サンフランシスコ在勤（明治39・12）、シカゴ在勤（明治41・7）、のち参事官となり外交官をやめ、東北大学の教授になった）は、この暗殺主義なる印刷物について、つぎの二人に内部調査を命じた。

川崎巳之太郎（一八七三〜一九五一）……茨城県久慈郡のひと。明治学院を卒業したのち、日刊新聞『世界之日本』の編集長となる。明治三十一年（一八九八）渡米し、カリフォルニア大学の聴講生となるかたわら、新聞『日米』を刊行。オークランド日本人会の幹事。日露戦争ちゅうは、日本の邦字新聞の特派員をつとめ、明治四十二年（一九〇九）帰国し、内務省警保局・社会局の嘱託となる。のち衆議院議員となる。

異 鉄男……同人についての経歴は不詳。伊予宇和島の人らしい。父は同地の名士であった。大和田建樹（二八五七〜一九一〇、明治期の歌人・国文学者）は同人の義兄にあたるという。³¹ オークランドの日本人会の幹事であった。



サンフランシスコの日本総領事館の密偵。

[左] 川崎巳之太郎

[右] 巽 鉄男

兩人は日本総領事館の秘密探偵（スパイ）として情報収集にあたり、それを松原に報告した。かれはそれを電報または郵送で本省に送った。

暗殺主義ノ発行ニ関シテハ 竹内鉄五郎起草ノ任ニ当リ 小成田恒郎之ト通謀（しめしあわせことを企む）乃至 教唆シテルモノ、如ク 其他岩佐
 倉持等ノ関係セルハ勿論ナルヘキモ 前記同主義者カ……

注・巽 鉄男の報告。

在留日本人は、直ちに、あちこちにベタバタと張られた公開状はがしにやっきとなった。が、ことはそれだけでおさまらず、明治四十年（一九〇七）十一月十一日——The Call 紙や San Francisco Chronicle 紙などは、それを記事にし、掲載した。たとえば、『コール』紙の記事は、つぎのようなものである。

パークレーの日本人無政府主義者ら、ミカド殺害を計画
 サンフランシスコの日本総領事館に残されていた強迫状

天皇 告発さる

テロリストいわく、天皇は富者に迎合している。じっさいかれは生き神様ではない。

パークレー、十一月十日。当市において、組織された日本人テロリストと無政府主義者からなる秘密グループは、ミカドの暗殺をくだてたそうだが、かれらの組織の発表手段であるテロ行為を全州にまき散らし



サンフランシスコの日本総領事館が本省に送った『コール紙』(1907・11・11付)の切抜き。(外交史料館蔵)

た。数日前、天皇睦仁あての公開状一枚が、サンフランシスコの日本総領事館のドアの下におかれていた。日本人愛国者は、この組織のことが明るみに出ないように懸命の努力をしたが、日出づる国の支配者の命をおびやかす公開状は、八〇〇枚も日本へ送られたために、かれらの努力はむだにおわった。いま州内にいるあらゆる日本人は、その書簡を手にしており、

むさぼるように読み、さかんに論議している。ミカドの誕生日である十一月三日は、テロリストらが日本の支配者に公開状を発表する日ときめていた。が、数日前それをようやく書きおえ、同志をつのるため全州に郵送した。

その公開状は、そまつな紙にペンとインクを用いて書いたもので、あとで謄写版で刷ったものである。この方法だと、日本人はもの音を立てず、人にみつけられず仕事ができる。

『コール紙』 一九〇七・一一・一一付より

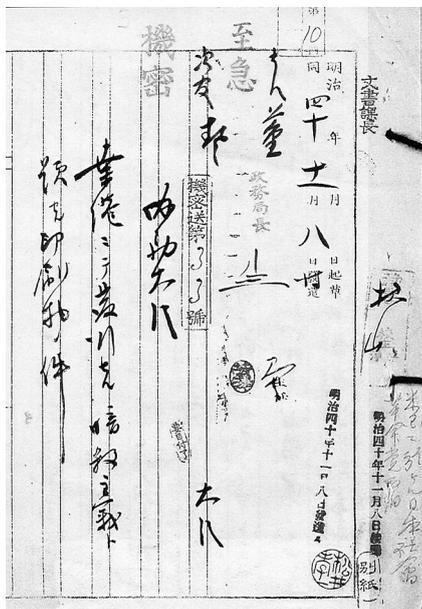
また『サンフランシスコ・クロニクル』紙の記事(一九〇七・一一・一一付)は、つぎのようなものである。

ミカドにたいする陰謀か

日本人革命家の書簡 猿類との血縁を指摘する

パークレー、十一月十日。パークレーやオークランドにあつまってきた日本人革命家グループのひとつが企てた——ミカド暗殺計画の証拠が、無署名の日本文として発見された。その書簡は、天皇の誕生日に、大平洋岸でくらす日本人住民のあいだに秘かに配られた。

本年二月十七日以来、この日は花の王国(日本)において、革命的出版物が発禁となり、また各種の社会主義紙の編者らが投獄されたときである。が、社会主義のシンパらはオークランドやパークレー、その他太平洋岸の市にあつまり、カリフォルニアを日本語の禁制文献の基地にしようとしている。



サンフランシスコの日本総領事館の松原一雄が、本省に送った不敬事件発生の機密電（第一報）。

“テロ行為”^{リズム} というのは、無政府主義者やテロリストらが、日本の天皇である睦仁^{むつひと}にあてて出した公開状のタイトルである。同書簡の内容は、ミカドは神とあがめねばならぬとする迷信とダーウィン説との関係を論じたものである。またこの書簡の書き手らは、ロシアのテロリストらの実例を利用し、おなじ戦術を用いることを意図したという。

“テロ行為”は、秘かにバラまかれた。その一部は手先によりサンフランシスコの日本総領事館の部屋に置かれた。千部ほど日本国内でバラまくために送られた。当地の日本人居住者の中には、恐怖を感じている者もあり、書簡をうけ取るやすぐ処分した。太平洋岸にあるどんな日本の印刷所も信用できぬから、筆者を秘匿するために、謄写版で刷ったのであろう。

書簡には約三千ほどの文字が用いられており、型紙^{ステンシル}を必要としたので、その一つ一つは入念につくられた。全紙には削除箇所はなかった。同書簡を準備するために、数週間費やしたことははっきりしていた。

“テロ行為”を全体としてみると、無政府主義的である。その手段の半分をも支持することはできない。

明治四十年（一九〇七）十一月三日（天長節）を期して、カリフォルニア州の各地にバラまかれた暗殺主義の“檄文”に接し、その内容にびつくりしたサンフランシスコの日本総領事館は、すぐに松原事務代理の名で本省の林^{たけふら} 董^{たけふら} 外務大臣にあてて至急機密電（33号）をうった。その内容を意識すると――

無政府党 暗殺主義者を自称する者が、十一月三日に三ページほどの謄写印刷物（テロ主義^{リズム}）第一号を配布した。日本皇帝睦仁君に与ふとの題目のもとに、いろいろ不敬の文字（皇室にたいし、敬意を欠いたことば）をならべている。……

公開状の現物は、十一月八日にサンフランシスコを出港するアジア号にのせ、本国に郵送するとある。

松原は外務省の訓令にしたがい、この事件の取締方法をさぐり、合衆国



植山治太郎が出した下宿屋の広告。“桂庵”とは、口入れ屋の意。『革命』(1906・12・20付)より。

地方検事ロバート・T・デブリンと面談したおり、事件関係者の捜査を依頼した。それにたいして、社会主義者・無政府主義者として

長谷川石松 植山治太郎 小川金治
ハヤト フジサワ 竹内鉄五郎 岩佐作太郎

倉持善三郎

小成田恒郎

らの名前があがった。大半はパークレーで“日雇いしごと”をしている、といい、一部はサンフランシスコにいう。大方の者は、テレグラフ通りにちかいパークレー街の“赤い家”(植山治太郎の下宿屋)の住人であった。

竹内・岩佐・長谷川・フジサワらは、最近パークレーのスブルース街二二二番地に引っこしたという(一九〇七・一二・一九付の松原宛デブリン書簡)。

デブリンによると、渡航後三年以内の者であれば、移民条例(第20条)により、本国送還の方法があるが、外見行為に出ないかぎり、処分できないという。なお松原はサンフランシスコの帰化局の役人ノースとも会って、その意見をもとめたところ、目下の程度では当事者の処分はむずかしい旨の発言があった。

ノースは、容疑者らがこの事件にかかわっている証拠を入手し、それをワシントンの政府に送り、本国送還の手続きをとる案を提示した。が、それには探偵を雇わねばならず、必要が、ることが問題であった。

明治帝にたいする爆殺予告が出た翌明治四十一年(一九〇八)八月——日本国内において、投書事件が二件おこった。一つは日本橋警察署へ、もう一つは外務次官にあてて出されたもので、いずれも“無政府社会党”の名で出されている。前者は——現内閣の諸公を暗撃し、鉄橋を破壊し、婦人をして貴族を襲わしめ、陸軍大演習のとき同志の兵をして将官をおそわしめる、といった内容であった。

末尾に、われわれは死刑をかくこの上だから、法律などを恐れていない、とあった。

後者は、遠江国中泉郵便局の消印のついたもので、桂太郎(一八四七〜一九一三、明治期の軍人、政治家)と大浦兼武(一八五〇〜一九一八、

明治期の官僚、政治家の生首をとること。陸軍大演習のとき、同志の兵をして将官を銃撃させ、東海道の五大鉄橋を破壊させること。また妙齡の婦人（うら若い女性）に貴族をおそわせる、とあった。

注・社会主義者沿革 第二（みすず書房、昭和59・10）より。

また大逆事件（明治43）のあと、在カリフォルニアの岩佐作太郎は、宮内大臣に不敬文書を郵送している（明治44・11）。

一 大逆事件の勃発

幸徳らがパークレーにおいて結成した「社会革命党」は、カリフォルニアにおいて、その後いかなる活動を継続したのか。かけ声よく結成されたもの、その勢いは現地においてしぼんでいった。が、その火はくすぶっていた。やがて日本国内の争議や社会主義者にたいする弾圧のニュースがアメリカに伝わるにつれて、それにたいしていきどおった同志は、ついに怒りを爆発させたのが、天皇暗殺の揭示とバラまき事件であったと考えられる。

わが国の治安当局は、それまでになかった「暗殺主義」の実行という点に驚がくし、山県有朋や桂首相らに社会主義者を根絶やしにする決意をかためさせ、それがやがて大逆事件を惹起するきっかけとなったものらしい。

旧刑法（第一章 皇室ニ対スル罪）では、――

天皇 三后（太皇太后、皇太后、皇后）

皇太子 皇太子孫

などに危害をくわえ、あるいは加えようとした者は、死刑（第73条）。皇族（天皇の一族）に危害をくわえた者は死刑、くわえようとしたものは無期（第75条）とする。「大逆罪」の規定があった。

ほかに神宮や陵墓（皇族の墓）にたいして敬意を欠く言動があると処罰された。不敬罪は最高刑懲役五年である。現行法では、皇室にたいする罪は、一般市民にたいするのと同様にあつかわれている（『皇室辞典』東京書籍、平成21・4。我妻 栄編『旧法令集』有斐閣、昭和43・9など

を参照。)

わが国における刑法の起源は、神代(かみよ)にはじまり、法律のことを「法」と称した。⁽³²⁾ 旧刑法はボアソナード起案のものに、旧ドイツ法の改正をくわえたものであった。

幸徳は「暗殺主義」と題するピラ配布事件とは無関係であったが、かれのもとに一枚送られてきた。大逆事件の第十三回の予審調書に、

問 この暗殺主義という新聞はいかに。

答 それは明治四十年十一月三日桑港で発行したもので、私方へも一部まいりました、だれの手になったものか、いっこうわかりませぬ。

とある。⁽³³⁾ 治安当局は、先の公開状と幸徳とをむすびつけたと思った。

「大逆」とは、人道にそむく行為、君主や親を殺すことの意味である。大逆罪(英:lese majesty)は、旧刑法第七三条に規定された天皇および皇族に対して危害をくわえ、またくわえようとすることによって成立し、死刑に処せられた。が、昭和二十二年(一九四七)廃止になった。

大逆事件(一名幸徳事件)は、明治四十三年(一九一〇)の初夏——突如おこった。五月二十五日に

宮下太吉 新田 融

新村忠雄 古河力作

ら四人がまず逮捕され、ついで湯河原で静養中の幸徳をはじめ、全国にちらばっていた社会主義者約五百名が検挙された。

当局のみるところ、社会主義者はいずれも階級の打破と財産の平等をさげ、遊食の徒であった。事件の発端は、明治四十三年五月——長野県明科の製材場の一職工・宮下太吉が「あるきわめて有効な爆発物」を密造していたという嫌疑によって逮捕された。⁽³⁴⁾「明科事件」。陰謀の発意者は、宮下であり、四十三年の天長節当日、天皇の行幸を期して、「爆裂弾」をもって大逆を決行する計画であった(「判決書」)。

ところが事件は、その後意外な発展をとげ、幸徳伝次郎・大石誠之助・菅野スガ・森近運平・新村忠雄・内山愚童・奥村建之ら二十六名が検挙

された。裁判は非公開でおこなわれ、大逆罪として起訴した。翌明治四十四年（一九一〇）一月、二十四名を死刑とし、（うち十二名は無期に減刑）秋水ら十二名は絞首刑に処せられた。

天皇暗殺計画は、わずか三、四人の計画にとどまっていたが、治安当局は、このえがたい機会をとらえて、他の二十余名をもせんめつしようと計ったようだ。⁽³⁵⁾ことに首魁（首謀者）にデッチあげられた幸徳について、「幸徳ほどの男が、この事件に関係のないはずはないという推定のもとに、証拠はきわめて薄弱であったが、検挙することにきめた」（当時の検事総長・小山松吉「のち法政大学総長」の講演速記「日本社会主義運動史」〔司法省極秘〕という。

幸徳という人は、大逆にまったく関与していなかったのか。その意見と行動には、いくぶん灰色の部分があるのはいなめない。かれの友人・岡繁樹は、サンフランシスコに在住すること五十余年——昭和三十五年（一九六〇）六月五日亡くなった。長寿にめぐまれ、行年八十歳であった。岡は明治三十九年六月、サンフランシスコ大地震のため滞在を切りあげて帰国することになった幸徳とおなじ船で一時帰国するのだが、かれは船中で、幸徳から秘策（秘密のはかりごと）を伝えられた。

——日本で革命をおこすには、天皇制を打倒しなければならぬ。岡君、君は日本に帰ったら、貴族院（貴族や官選議員で構成される。衆議院と対等の権限をもち、特権階級の利益を代表した。昭和二十二年廃止）の衛士（警備員）を志願し、天皇に近づく機会をうかがい（たまえ？）。

と勧められたようである（『寒村自伝』(上)、一九二頁）。

真意はどうあれ、これは幸徳のいっときの大言にすぎなかったであろう。しかし、かれははじめ宮下らの謀議にあずかり、爆弾の製法を奥村から得、それを宮下らに伝えたことは疑うべきもないという（寒村）。

（菅野スガの証言）

一、一昨年（明治）四十一年十二月中頃二機会アリ 心底打明ケテ相談シタ

幸徳八同意

一、爆裂弾ヲ用フルト云フ相談

一、三月中、転地、湯河原

幸徳ヨリ実行ヲ延バセ、自分ノ著述ノ助ヲナセト頼ム

幸徳ノ意思ヲ危ム

一、幸徳ハ 中頃実行中止ノ考ガ見エタ

(幸徳の証言) 二時二十分

一、我々ハ政府ノ迫害ニ屈スルコトナク 主義ノ為メ 闘ハザル可ラズ、压制ニハ反抗ナカルベカラズ、自由ハ反抗ニヨリテ得ラル。

一、上京ノ途次、紀州ニ行ク

大石等トノ会合

革命ト云フコトハ云ハズ

革命ハ自然ニ来ルト云フ考

一、熊野川ノ舟遊

大石ニ爆裂弾ヲ作ルコトヲ知ッテ居ルカト聞イタ、之ハ爆裂弾ハ革命ノ為ニハ イツカ必要ガ生ズルコトアルベシト予期シ居タリ

注・「平出 修

大審院特別法廷覚書」より。

『幸徳伝次郎他二十五名

大逆事件判決書

大逆事件の真実をあきらかにする会刊行』所収。

幸徳は、その意見と態度に、首尾一貫を欠くところがあったらしい。

明治四十一年の十一月ごろ——、というところ、例の暗殺主義と題するピラが、アメリカや日本にバラまかれた時期でもある。が、このころ坂本清

馬(二八八五〜一九七五、高知のひと。無政府主義信奉者。大逆事件で死刑の判決を受けたが、無期となる。戦後、最高裁へ特別抗告したが、棄却された)は、幸徳よりつぎのような指示をうけたようである。

——いずれ何かをしなければならぬから、そのときのために、全国を遊説して、意志堅固な者を数十名あつめてくれ。それに必要な金は、わたしが出す(大逆事件の真実をあきらかにする会編『大逆事件を生きる——坂本清馬自伝』新人物往来社、昭和51・7、六九頁)。

「何かをしなければならぬ……」とは、意味深長なことばである。が、坂本はとりあえず承知した。

ところが、坂本が語ったこの供述は、治安当局によって、「暴力革命」「決死の士」として記録され、本人にそれをよみ聞かせるときは、「革命」とか「意志堅固の士」とよみかえ、署名押印させた。

つまり調査は、変造されたのである。

当局のねらいは、大逆事件において、ひとりでも多くの社会主義者をアミにかけて捕え、それには罪をでっちあげることをも辞さなかった。

大方の日本人は、むかしもいまも天皇制にたいして大きな疑問をいだかず、国民の天皇家にたいする讃仰は根深いものがある。しかし、当時一部の過激派は、その偏見や謬想(あやまった考え)を打破するには、暴力革命(爆弾を用いての社会的騒乱)をおこすしかないと考えた。それは大規模な暴力行為というより、恐慌手段によって政府や世間を震撼させるもので、攻撃のまことに決めたのは天皇暗殺であった。

天皇暗殺を思いついた宮下は、明科(あかしな)におもむく途中、幸徳を訪れ、まず管野に決心をかたり、その同意をえ、その推挙した新村、古河らを加えて計画を謀議し、それが大逆事件を惹起したものでらしい。³⁶しかし、それは全国規模の組織的な大陰謀というより、うちうちの密談、座談にすぎなかった。大逆は政府の迫害にいきどおった一部の社会主義者が、その報復として計画したものであった。

ともあれ刑法第73条は、わが国のいまの共謀罪のように、陰謀(ひそかにたくらむ計画)のみで成立するものであった。³⁷大逆罪は、天皇——皇后——皇太子にたいする既逐(きすい) (すでにやってしまったこと)のほか、未遂(みすい) (計画だけで、まだしとげていない)や準備、陰謀といった計画段階であつても、既遂犯とおなじ処罰対象とみなされた。幸徳は計画途中で脱退しているが、とうていその罪科から逃れることはできなかった。かれは

従容として服罪する気でいたものか、判決のさい幸徳は、

——これだけ主張すれば、もう本望ではないか。同舟に乗りあわせた同志として、いさぎよく刑をうけようではないか。といった意味のことをいったという（法学博士 鵜沢総明「大逆事件を憶う」）。

一 絞首台への道

こんにち世界中でもっとも重い刑罰とみられているのは、罪人の命をたつそれ（死刑）である。わが国では明治期よりいまも絞首刑がおこなわれている。社会生活の規範となるものは法律であり、ひとは罪をおかせば当然刑にふくさねばならぬのに、悪運にめぐまれ逃れている者も多い。一つには、社会公共の秩序を守るしごとを担当する□□が、てきとうな理由をつけ、責任をほうかぶりしているからである。すなわち、何の得にもならぬ、めんどろな捜査と逮捕をとくに忌避しているからである（たとえば、他殺を自殺として処理することなど）。しかし、悪はいつまでもつづくものではない。とくに凶悪は、天道によってかならず誅される。おてんとうさまは、すべておみとおしである。ことに殺人罪には時効がない。

犯罪を実行する者を正犯とすれば、その協力者は共犯である。が、利益（たとえば金銭）を提示し、さしずしたり、囑託（たのんてまかせ）によって犯罪を依頼する者がいる。いわゆる教唆犯である。人を、そ、その、かして、犯罪を実行させた者は、正犯の刑を科される（共犯第61条）。その方法は、はっきりこうしてくれ、といわなくても、それとなくいう（暗示的な方法）でも、教唆は成立する。

近年、全国規模でこれまでにない怪しい事件が多発している。が、いずれも未解決のままである。治安当局のいっそうの活躍と摘発がのぞまれる。それはいずれも教唆犯の犯罪と考えられている。するとその依頼人は、だれなのか。犯罪心理学的にいえば、変質者Ⅱ偏執狂（サイコパス）のばあいが多い。その者はどんな仕事をだれにたのむのか。いまの時代、請け負人はなんでも屋——ヤクザ——探偵社——□□□□などである。

たのまれる仕事は——

住居侵入（元法大教授を狙ったマンションにおける空き巣、大学の校舎に侵入し、器物を損かい）——いやがらせ（張り込み、尾行）——墓地荒し

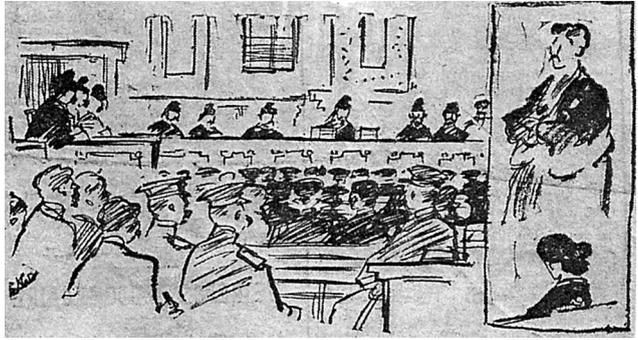
(個人墓および骨つぼ損かい。永井荷風の先哲の墓を損かい)——社寺にたいする不敬——ピストル発射(富山の住宅地、都内の街路および大学の工場現場)——殺人(バラバラ殺人、老人、老夫婦)——殺人予告(法政大学への)——図書館襲撃(早大中央図書館や全国の公共図書館における)切り取り)——放火(人家、温泉旅館、料亭、屋形船、工場、建築現場、変電所、城郭)——電車事故(無人発車)——架線切り——介護施設襲撃——窃盗(都内の大学図書館における利用者の所持品、図書など)——ひき逃げ

など、枚挙にいとまがない。くさった社会であるから、社会秩序を守る組織ですら、重大事件に目をつぶり、金に毒され、裏では怪しいことをやっているようだ。仄聞したところでは、たとえば依頼をうけて、巡邏車や警邏が張り込みをおこなうのがそれである。なんとまあ、あきれた、びっくり仰天の社会である。巷間のうわさでは、一連の事件の教唆(やらせ)犯は、某私大(東京の西の方角に位置する)の元女□□長(84歳)という。いずれこういった大規模な集団的犯罪は、当局によって摘発され、マスコミを大いにぎわすであろうが、これは犯罪社会学の見地から合格の研究テーマである。

死刑を科する犯罪は、当時もいまも大して変わらず、左記のようなものである。

- 一 皇室にたいする危害罪。
- 一 国家の政治秩序を侵害する犯罪。
- 一 汽車や船舶を転ぶくさせ、人を死傷させる罪。
- 一 一人の住む家屋、その他の建造物に放火した罪。
- 一 殺人または強盗殺人の罪⁽³⁸⁾。

このうち皇室や国事にたいして罪を犯すものは、主義や信条のため、死をおそれず、あえておこなう。大逆罪の判決。



『ユマニテ』紙（1911・1・21付）にのった判決の日の裁判所の風景。

「時は明治、年一月、日。一代の耳目を聳動せしめた。某犯罪事件の判決の言渡のある日である」

これは平出 修（一八七八〜一九一四、明治・大正期の歌人、小説家。代用教員をへて弁護士。明治法律学校（現・明治大学）を卒業後、弁護士となり、大逆事件の弁護を担当）の小説「逆徒」（『太陽』第19巻第12号所収、大正2・9）のなかの一文である。「逆徒」は、大逆事件を真正面から扱った随一のものであったが、それを掲載した『太陽』は発禁となった。

冒頭の「明治、年一月、日」は、伏せ字になっている。が、明治四十四年（一九一一年）一月十八日である。この日、午後一時からはじまる公判に出廷するために、二十六名の被告は、午前十一時五分黒ぬりの檻車（二頭立ての馬車）八台に分乗すると、東京監獄（牛込区富久町にあった刑務所。のち「市谷刑務所」と改称）より霞ヶ関の大審院（最上級審の裁判所）へとむかった。沿道には警官や憲兵が配置され、厳重な警戒をしていた。

午後一時五分ごろ、大法廷の右手のおもい扉があくと、編笠（頭にかぶるかさ）すがたの被告らが入ってきた。かれらは被告席につくと、編笠をぬがされ、手錠と腰なわをはずされた。法廷内には、政府要人、英米蘭大使館の館員、弁護士、新聞記者らの姿があった。

裁判長・鶴 丈一郎以下陪席判事らが入廷し、着座すると、「一同起立」といわれ、被告および弁護人らが立ちあがった。裁判長は、判決文の朗読にとりかかった。主文はあとまわしにし、判決の理由からはじめた。それは長いものであった。五〇分ほどかかった。

裁判長の口跡（ものの言い方）は、低調で、平板であった。五、六行よみ進んだとき、若い弁護人（平出 修）は、早くもさいごの断案（結論）を予想した。

（みんな死刑にするつもりだな……。）
とおもうと、悲しみで心がふさいだ。

理由書の朗読をおえた裁判長は、卓上のコップの水をのんでから、主文の朗読にうつり、被告一同を起立させ、声をはりあげると、

——右幸徳伝次郎外二十五名に対する刑法第73条の罪に該当する被告事件、審理をとげ、判決すること、左のごとし。といて、わずか二名をのぞき、被告二十四名に死刑を宣告した。

大逆罪は、一審にして終審（最終の裁判所の審理。それ以上、上訴できない）であったから、上告の道はなかった。判決の朗読において、「被告……を死刑に処す」の主文を起立して聴いていた被告らは、いきりたち、うち一人が「このとんちき（とんま）野郎が」というと、足元にあつた淡つぼを取りあげ、裁判長目がけて投げつけたらしい。が、法官席の縁にあたり、だれも負傷しなかった。

主文の言いわたしが終った瞬間、鶴裁判長と六名の判事は、アツという間に法廷を退席した。被告らは、やがて順次退廷するのだが、いちばん先に法廷をでるとき、菅野スガ（31歳）は被告席のほうを見、ニッコリ笑って

——みなさん、さようなら。さようなら。

と、いった（『大逆事件を生きたる——坂本清馬自伝』）。また幸徳は、被告席の仲間に会釈をし、看守がくばってきた編笠を右手で高くさしあげたが、無言であった。三浦安太郎（24歳）は

——無政府党万歳！

とさげび、それに何人かが唱和し

——万歳！ 万歳！

をくり返した。

十二名の死刑執行。

死刑の判決をうけた二十四名のうち、十二名の死刑囚は、死刑宣告の翌日、特旨（とくべつのおぼしめし）をもって死一等を減じられ、無期に減刑となった。明治四十四年一月二十四日——死刑の言いわたしがあつて約一週間後——雲がひくくたれ込めた寒い日の午前八時ごろより、午後四時ごろまで東京監獄において刑が執行された。処刑は、絶命した時刻から考³⁹えて、つぎの順序で執行されたものであろう。

一月二十四日 執行

幸徳伝次郎（41歳、午前8・6絶命）——新美卯一郎（33歳、午前8・55絶命）——奥宮健之（55歳、午前9・42絶命）——成石平四郎（30歳、午前

10・34絶命)——内山愚童(38歳、午前11・23絶命)——宮下太吉(37歳、0・16絶命)——森近連平(31歳、午後1・45絶命)——大石誠之助(45歳、午後2・23絶命)——松尾卯一太(33歳、午後3・28絶命)——古河力作(28歳、午後3・58絶命)

処刑がおわったのは、午後四時ごろであった。九時間ほどかけて、十一名をくびったのである。

管野スガだけは、一夜の生命をとりとめ、翌二十五日の午前八時すぎ、刑を執行され、午前八時二十八分絶命した。処刑がおわった夕刻、生前の知人らは死体の下付を請求し、つぎのように引きとられた。

幸徳・森近・古河・菅野……堺の社中
内山……寺沢イワ
奥宮……小山六之助
松尾……妻・静江の代理人・堀川フユ
大石……実兄・玉置西久

注・「十二逆徒の死刑執行」『法律新聞』(第六九三号)所収、明治44・1・30。
『大逆事件アルバム——幸徳秋水とその周辺』日本図書センター、昭和57・4などを参照。

幸徳ら死刑囚は、刑が執行される当日、ミカンと洋かんをあたえられた。かれらが刑死した当時の様子については、立会った役人、きょうかいし 教誨師もかたく口をとぎして語らなかつた。が、今村弁護士が、深川の無料宿泊所にその教誨師をたずね、懇望し、ようやくその一班をもれ聞くことができた。

幸徳は、監房から引きだされ、死刑執行のむねを伝えられると、獄吏に部屋に散乱している原稿を整理したい、といったが許されなかつた。かれはさいごまで原稿を書いていた。かれは従容として(おちついて)絞首台にのぼり、取乱した様子はみえなかつた。が、平気をよそおっているのではないかと疑われた。

宮下大吉は、絞首台にのぼり、「無政府主義万歳！」と叫んだとき、看守はろうばいし、あわててレバーを引いた。管野スガは、処刑当日、顔色はふだんと変わらず、微笑をたたえ、覚悟をきめ死についた（今村力三郎「芻言」『法廷五十年』所収、専修大学、昭和23・12）。くびられた死刑囚の遺骸は、絞首索によって、いずれも首すじに幅ひろの暗紫色のあとがついていた。荒畑寒村は、管野の遺骸を引きとった千駄谷の某家をおとずれたが、彼女の死顔をみる勇氣はなかったという（『寒村自伝』上）。

また堺は、悲憤のあまり大酒をくらい、信濃町駅の交番に小便をし、深夜の街にすえてある警視庁の赤いガス灯をたたきこわしながら彷徨したのはこのときであった。

大逆事件のあと、社会主義運動は火が消えたようになり、それは大正初年の第一次大戦末期までつづいたが、治安当局は監視をゆるめなかった。警視庁は「パンの会」（明治末期の耽美主義的文芸グループ）の牧羊神パンを、食べるパンと解し、これは不穏な会ではないかとみなした。また某理学士がかいた『昆虫社会』といった書物は、『社会』という文字が、当局の忌諱にふれ、発禁となった。

このように当局は、『社会主義者』とか『社会』という文字に神経過敏になっていた。大逆事件に関連するいっさいの報道は、新聞紙条例（第42条）によって禁じられ、国民は事情を知らされなかった。が、逮捕がはじまるやただちに、

片山 潜 加藤時次郎

らは、諸外国にその旨をつたえ、政府の思想的弾圧を報告した。片山は、大逆事件の逮捕がはじまると（明治43・5）『Government Oppression in Japan』（日本における政府の圧制）と題する論文を *International Socialist Review* Vol. xi, No. 2, Aug. 1910（『万国社会党評論』）に送り、宮下や古河ほか二名が、五月二十六日逮捕されたこと。当局の発表がないのでその逮捕理由がわからぬこと。使途不明の爆弾を秘かにつくった容疑で告訴された、といった日刊紙の報道があること。検閲がきびしく、新聞の編集部に官憲がうようよしていること。社会主義者は危険に追いこまれ、いつ逮捕されるかわからぬことを伝えた。

さらにかれば、仏紙『ユマニテ』の主筆ジャン・レオン・ジョレス（二八五九〜一九一四、フランスの社会主義者）に私信をおくり、自由の迫

害にたいし抗議してくれるよう訴えた。⁽⁴⁰⁾ それにたいしてジョレスは、十月中旬『ユマニテ』を通じて抗議運動にたち上るよう呼びかけ、十二月中旬パリの公控訴院の弁護士らは、日本大使に抗議文をつきつけた(『ユマニテ』紙、一九一〇・一二・二九付)。それ以後も抗議のいきおいはフランスを中心に漸次つよまっていった。

フランス、アメリカの諸新聞は、つぎのような見出しのもとに、抗議運動を展開した。

- 『ユマニテ』紙……………「日本の革命家たちのために」(一九一〇・一二・二七付)
 - 『 』紙……………「日本政府の犯罪にたいして」(一九一〇・一二・二〇付)
 - 『ジル・ブラス』紙……………「東京で二十六名の共謀ニヒリストの裁判がひらかれる」(一九一〇・一二・二二付)
 - 『ユマニテ』紙……………「日本人のために」(一九一〇・一二・二二付)
 - 『アクスイヨン』紙……………「日本における陰謀?」(一九一〇・一二・二二付)
 - 『世紀』紙スイエクル……………「日本における陰謀?」(一九一〇・一二・二二付)
 - 『ユマニテ』紙……………「日本人のために」(つづき)(一九一〇・一二・二四付)
 - 『ル・ジュルナル』紙……………「東京におけるセンセーショナルな裁判」(一九一〇・一二・二六付)
 - 『ユマニテ』紙……………「日本政府の裁判」(一九一〇・一二・二七付)
 - 『 』紙……………「日本の革命家たちのために」(一九一〇・一二・二九付)
- 年が明けてからの抗議報道。
- 『タイムズ』紙……………「日本の皇帝にたいする陰謀」(一九一一年・三付)
 - 『討論』紙デバ……………「日本における無政府主義者の裁判」(一九一一年・四付)
 - 『レクスプレス リエージュ』紙……………「正義のために」(一九一一年・三付)
 - 『ユマニテ』紙……………「起訴といた悪らつなやり口」(一九一一年・五付)
 - 『 』紙……………「残酷なる審判」(一九一一年・一九付)
 - 『ル・ジュルナル』紙……………「二十五名に死刑宣告」(一九一一年・一九付)
 - 『ル・マタン』紙……………「日本において二十五名に死刑を宣告」(一九一一年・一九付)

- 『 』……………「幸徳博士死刑を宣告される」(一九二一・一・二〇付)
- 『ユマニテ』紙……………「ミカドの犯罪。幸徳とその妻は処刑される」(一九二一・一・二〇付)
- 『^{ニエリ}世紀』紙……………「日本の無政府主義者たち」(一九二一・一・二二付)
- 『ユマニテ』紙……………「東京の殉教者たちのために」(一九二一・一・二四付)
- 『 』紙……………「日本政府の犯罪」(一九二一・一・二五付)
- 『 』紙……………「犯罪は遂行された。幸徳とその妻、および十名の仲間、昨日東京において処刑された」(一九二一・一・二五付)
- 『ル・プティ・パリズィアン』紙……………「日本の大裁判。幸徳とその妻、および他十名は、昨日東京において処刑された」(一九二一・一・二五付)
- 『ユマニテ』紙……………「東京の悲劇」(一九二一・一・二六付)
- 『レコ・ド・パリ』……………「世界の殉教者たち」(一九二一・一・二七付)
- 『ユマニテ』紙……………「血まみれのミカド」(一九二一・一・二九付)

一方、加藤時次郎は、大逆事件がおこるや第二インターナショナル本部(ブリュッセル)に連絡し、被告救援資金のうけ入れの窓口となった。アメリカで抗議運動に精力的にとりくんだのは、エマ・ゴールドマン(一八六九〜一九四〇)、アメリカの女性無政府主義者。ロシア生まれ、一八八六年渡米。一九一九年ロシアに追放)やヒポリッツ・ハーベル、岩佐作太郎を中心とする「在米日本社会主義者・無政府主義者」であった。ほかにイギリスの『フリーダム』(月刊誌)、日本の『ジャパン・クロニクル』紙、フランスのC・A・P、C・G・Tなどの団体が、それぞれ抗議運動を展開した。

十一月二十二日——エマ・ゴールドマンは、ニューヨークにおいて第一回抗議集会をひらいたのを皮切りに、以後抗議運動はボストン、セントルイス、サンフランシスコ、オークランド、ロサンゼルス、シアトルなどに広まった。

各都市の社会党本部、労働組合、宗教団体、知識人、一般市民らも抗議運動に賛同し、抗議の波(抗議書、電報など)は世界各国の日本領事館、大使館、日本外務省などに押しよせた。

日本政府は、幸徳事件(処刑)の反響に関して各国の動静が気にかかり、領事館や大使館からつねに情報をえていた。以下、その概要の一部をしるすと、左記のようになる。

「シカゴ」

当地はアメリカでも社会主義者の政治的勢力がわりと強いところである。社会党一味の中には、事実を誤解している者がおり、館員を派遣し、二、三の有力者に事件の真相を説明させた。指弾された点は、日本政府が社会主義者を迫害し、事件を秘密裡に審理しているということであった。シカゴの有力紙は、幸徳事件を対岸の火事とおもってみな沈黙している。が、日刊新聞 The Daily Socialist は、幸徳ら陰謀者に同情し、日本政府の処置を非難した（シカゴ領事 山崎馨一より、外相小村寿太郎宛電文 明治44・1・21発）。

「ベルギーのアンヴェルス」

当地の「平民共産団」^{レ ソリダールダンベール} Les Solidaires d'Anvers（「アンヴェルスの連帯」ほどの意）は、一九一一年一月十五日（日）——^{アントフェルシユコフハイイス} Antwerpse Koffiehuis（「アンヴェルスのカフェ」ほどの意のオランダ語）において通常の総会をひらいた。席上、同胞の自由のために大奮闘し、罪をえた二十五名の逮捕に関して、日本政府に抗議することを決議した。（アンヴェルス領事 山中□□^{不明}より、外相小村寿太郎宛電文 明治44・1・24発）。

「アメリカオレゴン州ポートランド」

一九一一年一月二十二日——当地の社会主義者の集会において、日本社会主義者の処刑に抗議することを決議し、駐米日本大使館、領事館に抗議書を送ることをきめた（ポートランド ^{領事}代理 大山卯次郎より、外相小村寿太郎宛電文 明治44・1・27発）。

「フランス パリ」

幸徳一派の処刑に抗議し、二月二十日付の『ユマニテ』紙において、労働連合組合は、市中各所に印刷物を貼付し、運動することを明らかにした。そのため日本大使館では警備を強化した。が、二十日の午後六時半ごろ——無政府党员四十名ほどが押しかけ、うち若干名が館員に面会をもとめた。門衛は相手の挙動がおだやかでないので警官隊をよび、押しかけた者を解散させた。

二十三日の夜——労働連合組合が主催する集会があり、会衆を煽動した。二十五日にいたり、死刑執行の報告が各新聞にのると、過激派はさらに毒筆を弄した（在仏特命全権大使 栗野慎一郎より、外相小村寿太郎宛電文 明治44・2・4発）。

一 大逆事件の余波

言論、集会、労働運動にたいする政府の暴圧（力による押えつけ）が、赤旗事件をうみ、それがさらに大逆（幸徳事件）をひきおこし、大逆事

件がさらに虎ノ門事件を連鎖的に惹起したことは、奇しき因縁というほかない。これらの事件はすべて政府の迫害に端を発し、その報復として計画されたものである。

虎ノ門事件（大正12・12・27）は、帝国議会開院式に出席する裕仁親王（のちの昭和天皇）の自動車にたいして、難波大助（一八九九〜一九二四）、大正期の無政府主義者。早大高等学院中退）が、しこみ銃で狙撃した。が、弾ははずれ、その場で逮捕され、非公開裁判で死刑になった。これも大逆事件である。この事件がおこった大正十二年（一九二三）六月には、第一次共産党の大検査があり、九月には関東大震災がおこり、そのどさくさに

(一) 亀戸事件……大震災の混乱に乗じて、「南葛労働組合」の労働者十数名が、軍隊と警察によって虐殺された。

(二) 甘粕事件……大震災でこた返しているとき、麹町憲兵分隊長・甘粕正彦（一八九一〜一九四五）が、大杉栄・伊藤野枝らをひそかに扼殺した。

(三) 朝鮮人や中国人虐殺……六千とも一万人以上ともいわれた朝鮮人、中国人が野蛮なる方法で殺された。

などがおこった。が、(一)では一人の処罰者はなく、(二)では十年の有期懲役になったが、昭和二年（一九二七）出獄し、満州にわたり、のち満州映画協会理事長になった。(三)では一人も処罰者はなかった。

難波は国家の法がいいかげんなもの、勝手気ままなもの、そのときの状況に応じてつごうのよいように変わるものごとく感じたようである。かれは復しゅうのほこ先を、支配階級へむけ、それへの抗議もしくは警告としてテロに走ったらしい。⁽⁴¹⁾

ほかに桜田門事件（昭和7・1・8）⁽⁴²⁾がおこっている。昭和天皇は陸軍の観兵式から帰る途次、桜田門外の沿道から手榴弾を投げつけられたが、前方の馬車にあたり無事であった。犯人の李奉昌は、大逆罪で絞首刑になった。

むすび

菅野スガは、公判の最終陳述のとき、わたしたちの計画は、途中で発覚したために失敗したが、他日かならずわたしたちの志をつぐものがあらわれる、と豪語したという（今村「芻言」⁽⁴³⁾（いやしい者のことばの意））。その志をついだのは、難波大助や李奉昌であったろうか。この二人も

志をとげることなく、あえない最期をとげた。

幸徳がアメリカを去るとき結成した「社会革命党」の同志のひとり、岩佐作太郎は、明治四十三年（一九一〇）十一月——「日本天皇（おま）及属僚諸卿（しよけい）に与（あた）ふ」といった公開状（強迫状）をサンフランシスコの日本総領事館に提出した。その要旨は——もし幸徳らの血をみるものがあれば（殺害したばあいの意）、卿ら（けい）および卿らの子孫の安危（あんき）（安全か危険）にかかわるものと覚悟せよ。いまの世界は革命の世界である。いまの時代は、革命の時代である。日本はこの風潮に超然としておれるだろうか。

十二月十六日には、「幸徳記念演説会」が、ジャック・ロンドン（一八七六〜一九一六、アメリカの小説家、社会主義者）の後援により開催され、翌一九一一年一月二十三日、オークランドのウェブスター・ホールで、日米合同の大抗議集会がひらかれた。⁽⁴²⁾

在米「社会革命党」の同志らのおどしと願いは、日本の上層部にはとどかなかった。が、かれらは、いちはやく処刑のニュースに接したことであろう。Oakland Tribune 紙（一九一一・一・二四付）は、幸徳事件の関係者の断罪（処刑）について、つぎのように報じた。

陰謀者ら、日本において服罪。

十二名 日本の皇帝にたいして陰謀をたくらみ
死刑になる。

うち一人は、サンフランシスコで新聞を出したことが
ある新聞人。

東京 一月二十四日 皇帝および皇族の生命にたいする陰謀によって起訴された十二名の無政府主義者は、本日当地の監獄において死刑を執行された。処刑された者のなかには、主謀者といわれる幸徳伝次郎とその妻がいた。幸徳は新聞人であった。その急進的な著述ゆえに、数年前日本をはなれざるをえなかった。かれはサンフランシスコに行き、そこでしばらく社会主義的なものを刊行した。その後東京へもどると、陰謀をたくらんだとされた。その陰謀により、二十六名の共謀者のうち十二名が本日処刑された。

死刑の判決をうけたのは二十四名であるが、その半数は終身刑に減刑になった。

在米日本革命党。

一月二十五日——在米日本社会主義者・無政府主義者ら十九名は、サンフランシスコの朝日印刷所で、大逆事件で刑死した者の追悼会をひらき、「在米日本革命党」の名をもって声明文を発表し、一月二十四日を革命記念日とすることを宣言した。⁽⁴³⁾それを意識すると、つぎのようになる。

狂暴なる日本政府は、ついに世界の反対運動を無視し、人道の戦士——日本革命の先駆者 幸徳秋水以下十一名をけさ九時をもって殺りくした。われわれはここにその狂暴にたいして感謝の意を表します。以後、毎年一月二十四日を日本革命の記念日とすることを宣言いたします。

一九一一年一月二十四日

在米日本革命党

この宣言文は、日本領事館へ届けられ、さらに船便で本省に送られた。

この日の出席者には、岡 繁樹、岩佐作太郎、植村直太郎^(註)らの顔がみられた。

大逆事件において、裁判所は奔馬^{ほんば}（にげ走る馬^{うま}）さながらのスピードで、審理をいそぎ、判決のいい渡し後、被告らをわずか一週間で処刑したが、その処刑をいそいだのは、海外における抗議運動の昂揚であったようだ。

その検挙から処刑までの異例のスピードぶりは、左記のとおりである。

明治43・5・25……………明科製材所の職工・宮下太吉の逮捕。

〃 10月……………予審の終結。

〃 11・9……………幸徳以下二十六名の公判開始を決定。

〃 12・10……………大審院特別法廷で公判はじまる（非公開）。

〃 12・29……………審理終了。

明治44・1・18……………死刑判決。

〃 1・24……………幸徳ほか十名を処刑。

〃 1・25……………菅野スガの処刑。

これを機に政府による社会主義、思想の取しまりは苛酷となり、ある者は身をひそめ、また転向する者もでた。しかし、浮世顧問を標ぼうする堺利彦を中心とする売文社は、社会主義の灯をまもりつづけた。かれらは獄中の同志の救援、処刑された家族の慰問、同志追悼の行事、社会労働運動の関連文献の保存、思想の宣伝などに勇往邁進（ためらわず前進）した。

大逆事件の図式、構図はつぎのようなものである。

赤旗事件に激怒した在米社会主義者らは、そのえんさの声（うらみ）を天皇にむけた。

神がかり的な天皇家の偶像を破壊し、その悪逆無道ぶりを糾弾し、すめらみことの命すらうばう、といった脅迫（おどし）を、日本政府につくった在米日本社会主義者の公開状は、大逆の本源（おもと）である。それは太平洋のむこうにある日本の官憲に流血の幻想を生じさせ、日本の同志に、とりかえしのつかぬわざわいを持たらしたことはたしかである。大逆事件がおこる三年まえ——明治四一年五月——渡米ちゅうの東大教授・高橋作衛（一八六七—一九二〇、明治・大正期の法学者）から、在米日本人社会主義者の動向についての情報をえていた元老・山県有朋（一八三八—一九二一、明治・大正期の陸軍軍人、政治家）は、それを天皇に密奏したところ（ひそかにつげた）、「何とかとくべつにきびしく取りしまつて欲しい」、といった主旨の発言があった。⁽⁴⁾

山県のとおりによって組閣した桂 太郎（一八四七—一九一三、明治期の陸軍軍人、政治家）は、天皇の意を体して、社会主義者の取りしまり強化に猛進した。かくして治安当局は、社会主義者の言論・集会・刊行物・運動のすべての自由をうばった。

製材所の一労働者・宮下太吉の爆弾の密造が、たまさか大逆事件に発展したわけである。が、やがて幸徳は天皇暗殺計画の首謀者にまつりあげられ、さらに全国にちらばる社会主義者が漸次逮捕されるに至った。当局のねらいは、かれらをひっくり、根だやしにすることであった。当時もいまま、大逆事件はでっちあげられたものとする見方がつよい。

幸徳事件にたいする復しゅう劇が、難波事件であり、イタリアのヴェンデッタ（復しゅう）さながら、長年のはげしい確執（不和）が、さらに確執をうむといった連鎖は、断ち切れそうもなかった。

こんにち幸徳が足跡をしるしたカリフォルニア州——サンフランシスコやオークランドには、遺跡めいたものが多少のこっている。が、当時から一世紀以上も時が経過しており、そのころの建物は多くみられない。しかし、「平民社サンフランシスコ支部」が置かれたヘイズ街六八〇番地の家、かれが下宿したフリッツ女史宅（オーク街五三七番地）のそれなどは、幸徳にゆかりの建物である。これらの建物は、いま集合アパートになっている。

平民社の支部が置かれたのは、ヴィクトリア風の建物の地階であり、そこで岡 繁樹夫妻がくらしした。いまその家賃たるやワンフロア——六一〇〇ドルである（サンフランシスコは、全米でいちばん物価が高く、住宅難である）。幸徳は、フリッツ女史宅の二階の角べやでくらしした。いずれも外装は修繕されているが、建物そのものは当時のままである。これらの建物は、アメリカ時代の幸徳とその同志らをしる唯一の遺跡である。

筆者がアメリカ（主にカリフォルニア）における日本人社会主義者の活動ぶりに興味をもったのは、「米国ニ於ケル 日本革命党ノ状況」（『明治文化全集』所収）と題するサンフランシスコの日本総領事館の代理領事・松原一雄が、本省へ送った報告書に接してからである。はじめその内容に大して興味を覚えなかったが、木村 毅の「解題」を手引とし、よみづらい原文を少しずつよむにつれて、引きこまれていった。その結果生まれたのが本稿である。従来、明らかにされたことがない資料に、たまたまふれたことが研究に着手するきっかけになったことはいうまでもない。

在米社会主義者および大逆事件についての研究が途絶することなく、次の時代につながることを願ってペンをおく。

注

- (1) 松永昌三編『中江兆民集』筑摩書房、昭和49・11。
- (2) Theodore D. Woolsey: *Communism and Socialism in their History and Theory*, Sampson Low, Marston, Searle and Rivington, London, 1879, p.1
- (3) *The Encyclopedia Americana*, vol.7, Grolier Incorporated, Connecticut, 1991, p.146

- (4) 同右。
- (5) 注(2)の八八頁。
- (6) 注(2)の九二頁。
- (7) Emory S. Bogardus: *A History of Social Thought*, University of Southern California Press, Los Angeles 1922, p.228
- (8) じっさいこの言葉を発明したのは Brissot de Warville (一七五四〜九三、フランスの政治家、法学者。フランス革命期に活躍し、処刑された) であつた。Theodore D Woolsey: *Communism and Socialism*, p.102を参照。
- (9) 注(7)の二三二頁。
- (10) 注(7)の二三二頁。
- (11) K. J. Kenafick 編訳 Michael Bakunin — *Marxism, Freedom and the State*, Freedom Press, London, 1950, p.8
- (12) 注(7)の二四〇頁。
- (13) P. Kropotkin: *Memoirs of a Revolutionist*, Swan Sonnenschein & Co., LTD, London, 1906, p.24
- (14) 注(7)の二四二頁。
- (15) 辻 善之助著『日本文化史』春秋社、昭和45・4、一七八頁。
- (16) 『西 周全集』宇高書房、昭和37・6、七四二頁。
- (17) 加田哲二著『明治初期社会思想の研究』春秋社、昭和8・5、三五六頁。
- (18) 立山隆章著『日本共産党検挙史』、武侠社、昭和4・11、九頁。
- (19) 蛭原八郎著『海外邦字新聞雑誌史』学而書店、昭和11・1、一三九頁。
- (20) 坂本武人著『幸徳秋水 明治社会主義のシンボル』清水書院、昭和47・11、一七〇頁。
- (21) 片山 潜著『渡米之秘訳』出版社、刊行年不詳、二五二頁。
- 注・「三等先客はすべて移民として取りあつかわれた」とある。
- (22) 加藤時也に「我国医業の現在及将来」と題する論文がある(『太陽』第24巻第13号所収)。
- (23) 糸屋寿雄著『幸徳秋水研究』青木書店、昭和42・7、二〇三頁。
- (24) 無政府主義者アルバート・ジョンソンについては、サンフランシスコの *Directory* (住所氏名録) につきのようにある。

- Johnson Albert, engr. r. 414 Lily Av……Crocker-Langley San Francisco Directory, 1902
注・一九〇二年（明治35）当時、リリ街四一四番地に居住する（船の）機関士とある。
- Johnson Albert, engr. r. 414 Lily Av……*ibid*, 1904
- Johnson Albert, engineer, r. 414 Lily Av……*ibid*, 1905
- (24) 無政府主義者ローズ・フリッツについては、サンフランシスコの Directory（住所氏名録）につきのようである。
- Fritz Rose S Mrs. medical student r.384……Crocker-Langley San Francisco Directory, 1904
注・一九〇四年（明治37）当時、三八四番地に居住する医学生とある。
- Fritz Rose S, widow, r. 3713, 17th……*ibid*, 1905
注・一九〇五年（明治38）当時、一七番街三七一三番地に居住する未亡人とある。
- Fritz Rose S, dentist, 1371 Oak……*ibid*, 1908
注・一九〇八年（明治41）当時、オーク街一三七一番地に居住する歯科医とある。
- (25) 幸徳は、“腸カタル”の持病があった。
- (26) B. E. Lloyd: Lights and Shades in San Francisco, A. L. Bancroft & Co., 1876, p. 69
- (27) 日系移民資料集 ①『北米移民史』日本図書センター、平成3、12、一三四頁。
北米編 第1巻
- (28) 『新版 寒村自伝 上巻』筑摩書房、昭和40・1、一三二頁。
- (29) 同右、一三二頁。
- (30) 木村 毅『米国ニ於ケル日本革命党ノ状況』解題、『明治文化全集』第22巻 社会編（上巻）所収、日本評論社、平成5・1復刻版第一刷発行、四〇頁。
- (31) 注（23）の二四一頁。
- (32) 仲 節雄著『日本古代刑法思想史考』仲 節雄事務所、昭和18・2、二頁。

(33) 注(23)の二三九頁。

(34) 鶴沢聡明「大逆事件を憶う」『幸徳伝次郎他二十五名 大逆事件判決書』大逆事件の真実をあきらかにする会 刊行』所収、八〇頁。

(35) 注(28)の一八九頁。

(36) 注(28)の一九〇頁。

(37) 今村力三郎著『法廷五十年』昭和23・12、五五頁。

(38) 勝本勘三郎「死刑存廃論」『太陽』第19巻第16号所収、大正2・12。

(39) 処刑された者が絶息した時刻については、『大逆事件アルバム——幸徳秋水とその周辺』（日本図書センター、昭和57・4）ちゅうの各死刑囚の「略伝」を参考にした。

(40) 『大逆事件アルバム——幸徳秋水とその周辺』、一〇六頁。

(41) 注(37)の六八頁。

(42) 注(40)の一一〇頁。

(43) 同右。

(44) 原敬（一八五六—一九二一、明治・大正期の政治家、のち東京駅頭で暗殺された）も社会運動を弾圧したひとりだが、同人が、徳大寺侍従長から内々で聞いた話では、山県が陛下（明治天皇）に社会党取締の不完全なることを上奏したために、「何とか特別に嚴重なる取締もありたきものなり」の思召（かんがえの尊敬語）があったという（明治41・6・23付、原敬日記）。

主なる参考文献

『宍戸義知訳

ウール 古今社会党沿革 卷一』 明治15・7。
セイ氏 説弘令社発兌

社会主義

明治廿一年十一月廿五日 大学通俗講演会に於て

法科大学教授 和田垣謙三 講演

林 茂淳 筆記

注・この講演筆記は、『東洋学芸雑誌』、(第88号、89号、明治22・1・25〜2・25発行)に掲載された。

『北米踏査写真帖』吉川弘文館、明治44・3。

平山 修「逆徒」(小説)『太陽』第19巻第12号所収、大正2・9。

加田哲二著『明治初期社会思想の研究』春秋社、昭和8・5。

蛭原八郎「桑港日本人愛国同盟始末——主として其機関紙を中心にして」『明治文化研究 第二輯』所収、昭和9・5。

貴田菊雄「桑港で発行された邦字紙『愛国』のことも」『明治文化研究 第六輯』所収、昭和10・11。

今村力三郎著『法廷五十年』専修大学、昭和23・12。

トマソ・カムパネラ著『太陽の都』岩波書店、昭和25・8。
大岩 誠訳

『世界歴史事典 第五巻』平凡社、昭和26・11。

『 』 第九巻』平凡社、昭和27・4。

荒畑寒村著『新版 寒村自伝 上巻』筑摩書房、昭和40・1。

『原 敬日記 第二巻 政界進出』福村出版、昭和40・6。

『幸徳秋水全集 第4巻』明治文献、昭和43・6。

『 』 第6巻』明治文献、昭和43・11。

『 』 第7巻』明治文献、昭和44・2。

糸屋寿雄著『幸徳秋水研究』青木書店、昭和47・7。

辻 善之助著『日本文化史 第7巻 明治時代』春秋社、昭和45・4。

プラトン著『国家』岩波書店、昭和54・4。
藤沢金夫訳

『大逆事件アルバム——幸徳秋水とその周辺』日本図書センター、昭和57・4。

成田龍一著『加藤時次郎』不二出版、昭和58・9。

『続・現代史資料 1 社会主義沿革 1』みすず書房、昭和59・10。

『明治文化全集 第22巻 社会篇 上巻』日本評論社、平成5・1。

神崎 清著『革命伝説 大逆事件 4 十二個の棺桶』子どもの未来社、平成22・12。

〔自明治三十七年十月 至四十二年九月 過激派其他危険主義者取締関係雜件 本邦人之部 第一卷〕

〔明治四十二年二月 至四十四年 社会主义幸徳伝次郎外 二十五名ノ陰謀一件 第二卷〕

〔過激派其他危険主義者取締関係雜件 本邦人之部(別冊)主義者名簿ノ一〕(外交史料館蔵)

〔大逆罪の判決 幸徳秋水等^{廿四名}は死刑 有期懲役は僅に^{二名のみ}〕『東京朝日新聞』第八七〇八〇号所収、明治44・1・19付。

〔逆徒判決書』『法律新聞』第六九二号、明治44・1・25付。

〔逆徒判決証拠説明 不・俱・戴・天・の・陰・謀・事・実〕『法律新聞』第六九三号、明治44・1・30付。

〔十二逆徒の死刑執行〕同右、所収。

Oakland Tribune Jan. 20, 1906, Jan. 24, 1906

≈ Apr. 24, 1906

The Call Nov. 11, 1907

San Francisco Chronicle Nov. 11, 1907

Husted's Directory for the year 1905, Oakland, Alameda, Berkeley and Alameda County Published by F. M. Husted Crocker-Langley San Francisco Directory, 1902, 1904, 1905, 1907, 1908

Map of the city of Oakland (1904)

'Next Stop West Oakland, Alameda Magazine Jan/Feb 2013.

The Oxford English Dictionary Vol,III, Clarendon Press, Oxford, 1989